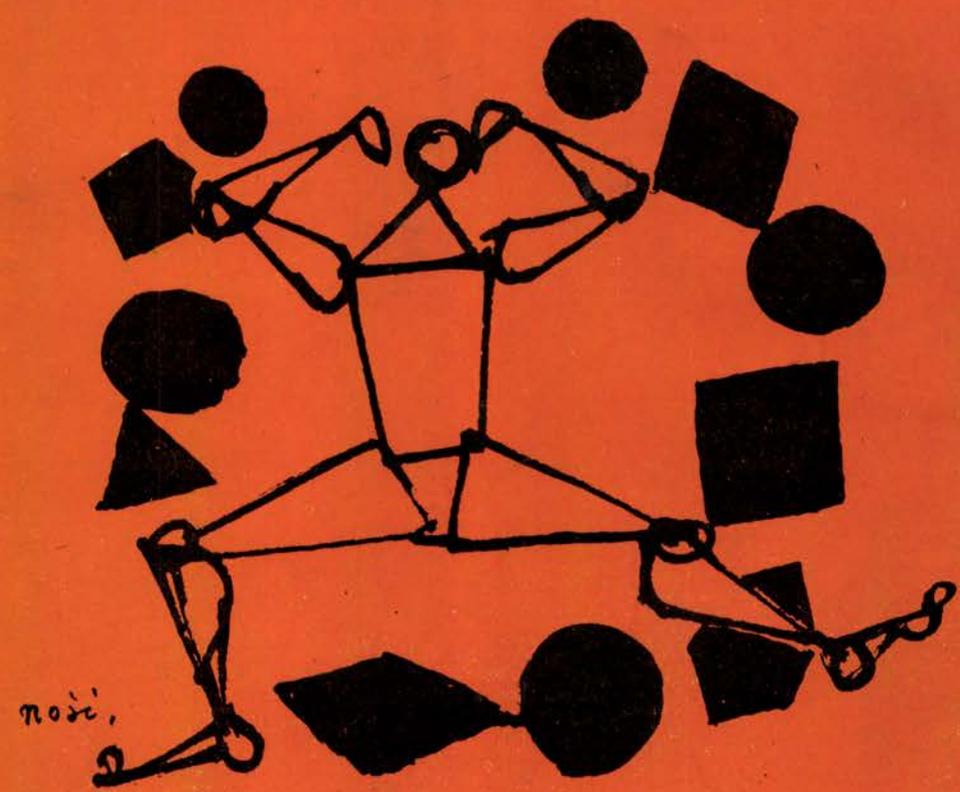


# 川柳の雑記

麻生路郎☆主宰



新春號

No. 380

Pensoj flugas trans la land-limon  
THE SENRYU ZASSHI

創刊第一号  
一月一日發行  
第三十四年一月  
（每月）回二百部  
館平大正十三年・通巻三百八十号

— 2月本社句会 —

物姉不客  
音妹細工種  
兼題

川柳雑誌社主催

# 新春川柳大会

明けましておめでとうございます。

## 句集「三人」刊行祝賀句会

日時 一月十五日(祭)午後一時  
場所 光明寺 (電話092600)  
大阪市天王寺区下寺町二丁目バス停前  
(市電下寺町又は日本橋三丁目下車)

兼題

「賀状」三題 麻生 葎乃選  
「盛装」三題 中島生々庵選  
「銚子」三題 西尾 栗選  
「車窓」三題 北川 春 栗選

席題

三題(当日発表)

講演

麻生 路郎 出席者 全員

川柳紅白試合

出席者 全員

余興(当日のお楽しみ)

出 席 者 全 員

表彰

昭和三十三年度不朽洞杯優勝者  
☆一カ年間本社句会全出席者

呈賞

☆各題三才 ☆兼題「賀状」実位に不朽洞賞  
☆紅白試合優勝側全員に粗賞

会費

百円

幹事 渡舟・いさむ・文秋・唐佑・狂二・与呂志・白木・木堂・月都・薫風子・水断・二三夫

★新春懇親祝宴・会費三百円

— 散会后同会場にて

★投句だけの方は郵券三十円  
同封(〆切一月十三日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

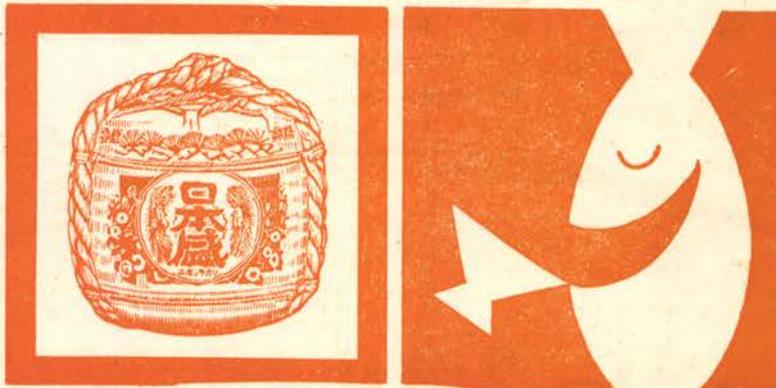
電・住吉06081

# 日本盛酒坊

新年の祝盃をどうぞ!

東京酒坊・八重洲口名店街  
大阪酒坊・南九郎右衛門町に

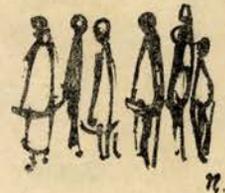
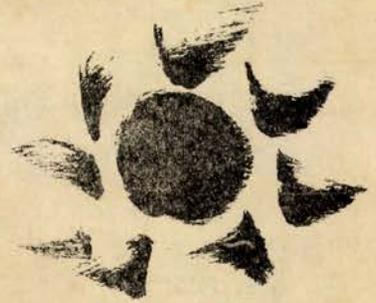
(新築中) 明春三月  
開店予定



灘の清酒ニホンサカリ

# 不朽洞句帖

麻生路郎



時の流れをハッキリ知った皇太子  
 清潔な方よと そつとのろけられ  
 皇太子さまの選外佳作だったのよ  
 三笠宮をおこらせたのも歴史なり  
 新聞に出たことだけで批評され  
 初日の出 自由はここにあるものを  
 音痴でも君ヶ代だけはうたったが  
 凡人にとっては松竹梅もよし  
 生きのびた印しに出した年賀状  
 名刺一枚で風の如く去る

一九五九年・一月

## 新春号目次

題字	麻生路郎
表紙	「十二神将」野尻弘
不朽洞句帖	麻生路郎 (一)
句評リレ	好郎・回天子・曉明 (二)
	妻太楼・東岸
不朽洞会総会記	戸田古方 (三)
新川柳鑑賞	麻生路郎 (四)
激業論とベニシリン医業論	高鷲垂鐘 (五)
年賀状に見る新年吟	北川春巢 (六)
川柳歳時記	水谷竹莊 (七)
異質ということ	東野大八 (八)
雅号由来記	吉田圭井堂 (九)
博多方言と川柳	速木真珠洞 (一〇)
今はこの文字を	不二田一三夫 (一一)
絵島・生島	富士野鞍馬 (一二)
★	
川柳塔	麻生路郎選 (一三)
同舟近詠	諸家 (一四)
近作柳緯	麻生路郎選 (一五)
	北川春巢選 (一六)
一路集	「勝気」武部香林選 (一七)
	「歌手」私津柳慶選 (一八)
	「八百屋」岡田夜潮選 (一九)
金泥集	麻生護乃選 (二〇)
入門講座	
研究題	戸田古方 (二一)
各地柳壇	(二二)
不朽洞会から	(二三)
柳界展望	(二四)
青ペン・赤ペン	(二五)



# 新川柳鑑賞

麻生路郎

それと察した菊のあるじは、我が子を余所へやったように思い、菊の手入れに出かけたのである。  
やった方と貰った方の生活ぶりや人物までが想像される。

〔六〇七〕

まにあわぬ順で日曜起きて来る  
(宗太郎)

「明日は日曜だから、ゆっくり寝よう」  
と云っておいたのに、赤ん坊が先ず目をさます、

するとその横に寝ていた三つの子が起きて来る。次に幼稚園、小学、中学へと通っている子どもたちが起きて来ることを詠んだもので、中年夫婦の家庭をまざまざと見せてくれる句である。

〔六〇八〕

税務署が見付けてくれた使  
い込み  
(宗太郎)

正直に申告していても税務署に調べられることはゆかいなものではない。ところが世の中にはこの句のような場合があつて大騒ぎしている会社や商店がかなり多くあるのであるまいか。税務署をこう云う方面から詠んだ句は珍ら

〔六〇一〕

悪筆の方が目に立つブラカード  
(省三)

ブラカードの下手クソなギコチない文字を見ると、私たちがゾツとした寒気を感じずにはいられない。こんな下手クソな字を書くような能力しか持たわさない連中が賃上げなどとチャンチャラおかしき気がするのである。それを作者は「悪筆の方が目に立つ」と皮肉ったのであろう。彼等の尖った気持がそのまま文字にあらわれたのだとすれば、悪筆の方がむしろ適切な表現になっているとは云える。

〔六〇二〕

酒が酒のみだした頃課長去  
(文庫)

上役がいつまでも酒席にいない、思いなしか酒がはずまて引き揚げるのが定石なのである。その潮時を酒が酒をのみだした頃と云ったので、この句のいのちはこの表現の巧みさにある。

〔六〇三〕

首相云う雨のふる日は天気  
がある  
(伍健)

首相ともなれば、もっともらしいことしか云わない。揚足をとられまいと云う意識が自然と当り前のことをもつ

ともらしく云う。そこを皮肉

〔六〇四〕

子澤山の番付へ任職がトツ  
ブ  
(幽谷)

子沢山と云えば昔から貧乏人と相場がきまつているようであるが、この村ではお寺に年中おむつが蹴っているのであろう。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀

仏と称えながらヒョコヒョコと子を生ましている住職を想うと、なかなかユーモラスである。

〔六〇五〕

くじ一枚で投資したよな氣  
にもなり  
(月都)

いつかは当るかも知れないと云う、はかないのぞみをいだいて、毎月毎月一枚ずつ、くじを買っている、投資しているような気がして米たと云うのである。なるほど、そんな気がするであろうとうなずけるところに、この句の面白さがある。

〔六〇六〕

頂いた菊の手入れにまで来  
られ  
(保美)

大輪の菊をほめたばかりに「持ってお帰りなさい。差しあげます」と云われ、もらつて来たのはよいが、どう手入れしていいか判らない。

しいと思う。

〔六〇九〕

生れ變りますと便利なことをいう (兎)

悪事をした場合に、その悪事を認めて、

「すみません」と云ってあやまる。

「今後、こんなことをしなければ、ゆるしてやるが……」

「決していたしません」「きつとか」

「へい。生れ變ります」と云うのである。そんなにも

まく生れ變れるものとは思えないがと云うのがこの句の真意である。

〔六一〇〕

本心が二伸に女心かも (蕙風子)

女と云うものはなかなか本心を打ちあけないものである。時には反対のことすら云う。この句、手紙に長々と何

ごとかを述べてはいるが、それには相手の気を引いて見た

り、虚飾の言葉がめんめん

と連らねてあるにすぎないが、その二伸には本心がのぞいて

いる。それこそ女心の実態なのであろうと詠んだもの。女

性心理を巧みにつかんでい

る。

〔六一一〕

幕間にも社長思いつきをメモ (清生)

社長とは凡そ忙しい仕事の人。観劇すら自分の意思から

でなく、お客様を御招待する

場合が多いのである。幕間にも、何かを思いつい

たらメモを取っておき、心は明日の仕事へと向っているの

である。軽い穿ちの句。〔六一二〕

英語の質問ないかないかと父はひま (春葉)

インテリの父が、子どもたちの勉強室へ声をかけている

さまが、ホーフツとして眼に迫ってくる。

さて、質問が出ると、それは一寸待てよと辞書を引いて

くれる父でもある。〔六一三〕

二丁目に住んで一丁目も知らず (梅志)

二丁目に住んでいて、一丁目も知らんどころか、都会生活

の活のあわたしきは、隣りにどんな人が住んでいるのかさ

えも知らないのである。考えれば馬鹿々々しい話であるが、それでいて結構自分

自分の殻を護って生きていると云うのである。何んの変哲

もない表現であるが都会人の人生がのぞいていて面白い。

〔六一四〕

余つ程のすばら仙人掌こりやいや (不)

仙人掌(しゃぼてん)と云うものは、水をやらいでも、

うっちゃらかしにしておいても結構生きているものだ。よ

うほどのすばら者が「こりやいや」と共鳴したのもムリ

はない。〔六一五〕

なめくじがモダンアートの線をかき (どんたく)

なめくじが這い廻ったあとの、ギンギン光る線の美しさは

モダンアーティストを佇立させるに充分であらう。なめ

くじは時にモダンアートそのものの線を描くからである。〔六一六〕

月給日行つて来ると勇ましく (どんたく)

大戦の時に「勝つて来ると勇ましく」という軍歌が流

行したが、その「来るぞと勇ましく」と云う引用句で構成

されたところにこの句の面白さがあるのである。ここで

も、いつていらっしやいと妻

子が見送っているところに共通した情景が描かれているではないか。

〔六一七〕

十二月襖をしめるのも忘れ (方大)

俳句に「盗人もあと閉ざしゆく夜寒かな」と云うのがあ

るが、十二月ともなれば、その寒さは一入で、隙間風さえ

首をちぢめるくらいだのに襖をしめるのも忘れると云うの

であるから、いかに忙しいかがうかがえるではないか。〔六一八〕

嘘ついて歸れば嘘が届いて (花代子)

大して嘘をつかなくてもよいことでも嘘をつく人間がいるものだ。

悪質な嘘は別として、嘘をつく習性

の人間は、何んの気なしにヒョイと嘘をつくものらしい。

この句は嘘をついて

帰ったところがその嘘が、もう届いていたと云うのであるから大した嘘ではないらしい。嘘がバレても平気であるような感じがこの句からうけとれるからである。なかなか面白いネライの句である。

〔六一九〕

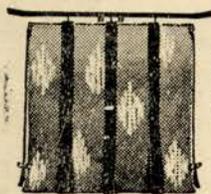
貧乏の幸福ばかり説く牧師 (明林)

「貧しきものは幸なり富むことを得なければなり」と牧師は常に云う。それには違いないが、貧しい者の多くは、それだけではなっとくがいけない。彼等は貧乏でない幸福が

どうしたら得られるかにあるのである。この句は牧師に

対するレジスタンスとしての穿ちだと云えよう。

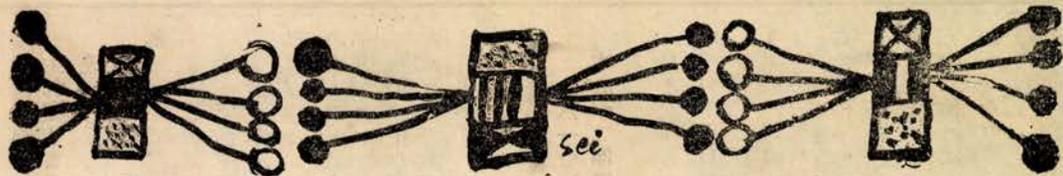
カフと路郎主幹



### 結婚式場 長生殿

神殿(2)控室(16)宴会場 (和洋9)御待合室・更衣室・美容室・写真室のほか、貸衣裳一切を完備しております ●6階

金曜 定休  松坂屋 大阪日本橋三



豊中市 戸田古方  
何んでもいやといえぬのが淋し

サングルの足さきぐらいはお洗いよ  
よくよく考えてみればこわいものばかり

大阪市 市場没食子  
警職法組上にのせて父と子が

バスガイド帰りは掛ける余裕出来  
大阪市 土井文蝶

酒に生き酒で死ねない病上り  
事業欲いつ迄続く命やら

屋の酒たれに遠慮がいるものか  
西宮市 若本多久志

護送される身に急行早過ぎる  
家計には触れず短冊などを書き

美しい恋とは他人さまが言う  
大阪市 正本水客

覚えてはりまっかと膳を越えてくる  
大阪市 丸尾潮花  
しつけ糸切って男を逢いに出し

兵庫県 小西無鬼  
学友の一人が買うてみんな買ひ

保健寮にて  
寝る人も騒ぐも同じ釜の飯  
大阪市 西いわを

敷が刺した程も思わぬ女にて  
契約は一カ年と云う二男さん  
ホノルル市 内藤草一郎

喜びを口笛にしてすつと立ち  
縁遠く花柳千家池の坊  
けなげにも仲居になると一年忌

プロレスならいいが議員のこの騒ぎ  
乱斗へ女議員を退避させ  
傍聴に来て観戦をして帰えり

ガムを噛む女映画を昼寝して  
東京へ着いた洗面所の鏡  
ホノルル市 築山快夢起

吐く息が聞える程に谷静か  
山羊の声霧の中から聞えて来  
いつの間に覚えた孫が爪を染め

晴れの日に花嫁ガムを噛んで居り  
特徴は愚直に近い勤めぶり  
定年の泳ぎ疲れと云う表情

松の木と帆掛が欲しい海景色

ホノルル市 白砂旋風  
雨降りに濡れて行く線の太さ  
年頃はいいなあー笑いが止まず

アタタのワタシと預金空になり  
ツイマル 羽佐間柳葉

肩書の手前貸せとは言い悪い  
家庭には向かぬ娘となり学を卒え  
風采で見れば社長で通ります

死んだ気でやれとあっさり言われたり  
豊中市 福田安夢

たばこと妖婦は同じかな白き肉体  
「だまされました」問抜けだも何故云えぬ  
奈良県 尾崎方正

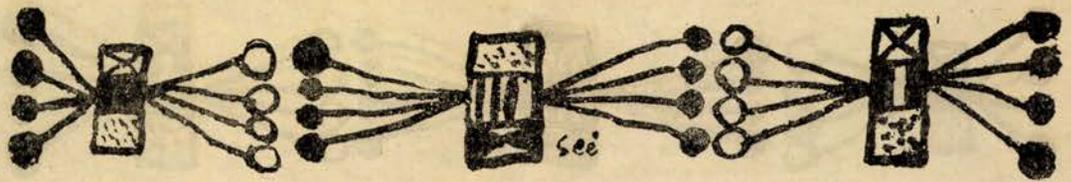
水溜り敗戦国の地面を画き  
堺市 吉田圭井堂

静かなる暴風株のことだとか  
宇部市 国弘半休

後ろ手を組むさえ厭長気をつかい  
女性のストックがあり春を売る  
防府市 長野井蛙

小使の不平等はドアーを足で開け  
アベックは席があっても狭くかけ  
岡山県 直原七面山

灯を消せば君もダリヤも闇の底  
耐震防火コンクリートの阿弥陀堂



わがままも聞いて貰えて肺を病み

蛙こんどは神伝流とシヤレてみる

浅学非才がたつぷり一時間の訓示

大阪市 西森 花村

十二月子供にため息まねられる

金借りて帰れば妻子フラフラ

試作品のように娘は産んでみせ

お茶もよしお白湯もよろし秋の友

鳥取市 河村 日満

昇給の額わたくしも下り坂

買うてする苦勞も云うて子を帰えし

感想の一句を新聞社はせかし

倉敷市 木村 千容

押しても引いても根のある石は動かさない

うぶのまま飛び込まれては拒まれず

圧力にたえて屈せぬあまのじやく

利食急ぐ一面ケチな株も抱き

秋晴れの体操教師うらやまれ

寝正月昔を恋しがるばかり

風邪ぐらい元日だけは起きていろ

加賀市 野村 味平

京都行

祇園恋しあやしき格子の灯もおぼろ

一方で一バイやろかと思えども

大阪市 木村 水堂

衆院議長職場放棄の手本見せ

ひばりさえもう年頃だ禿もする

父ちゃん威厳そこねたフラフラ

女房の後から養子稲を刈り

損しても十万円とは恐れ入り

パチンコが飯より好きなオバアチャン

グジグジとかやさもあらん面構え

大阪市 真鍋 一瓢

金あれば買える世なるも恨めしく

アルコールいささかで胆斗の如く

まあお丈夫などは色の黒いやや

大阪市 後藤 梅志

ピース缶のせて市バスの運転手

靴の紐解けたまま自動車に轢かれ

米子市 小西 雄々

伝言板待ちくたぶれて字がふるえ

母さんに言われぬ人と喫茶店

欲ばかりふえた初老をもてあまし

大阪市 吾郷 玲人

かんできのサンマが焦げる文化の日

収穫を語り西陽へ行くカラス

大阪市 山川 阿茶

精進のわるいドライブ雨になり

医者へ来ず石切さんへ礼にゆき

大阪市 金井 文秋

立読みの子におっさんはけちくさい

金語り質屋にテレビスクーター

子供みな寝かせてママのフラフラ

小松市 伊藤 茶仏

どん尻に順序不同と断られ

素人はこわいと芸の虫が云う

加賀市 那谷 光郎

なぐられて泣かずなぐって泣く女

豪華ビル履物脱ぐのかと思ひ

大阪市 北川 春美

朝の訪問入歯の音も聞えて来

心臓強く一つおぼえの黒田節

お見舞に行つて泣かれたのに困り

岡山市 浜田 久米雄

元日を山の上から見下ろして

思うこと多く元日を酔うとする

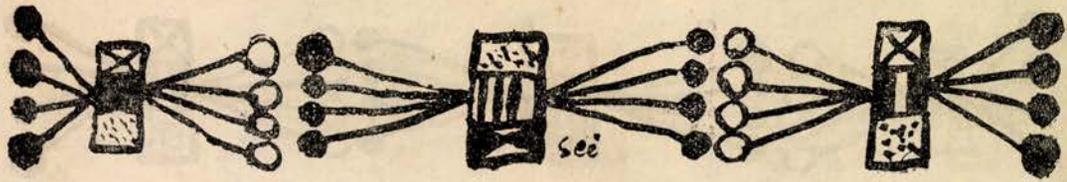
大阪市 菊沢 小松園

利子払う身分日月矢の如し

恐ろしい心が動くインキ消し

岡山市 逸見 灯竿

一アール幾らで売るかに手間をとり



並んでは歩けぬ小怪物足らず

裕ちゃんがなぐるのを見る金がいり

大阪市 武部 香林

不朽洞会総会に列す

親しさはあぐらのままで握手する

趣味ですと云う競輪でペンをかき

ややこしいかな死ぬるまで引く字引

大阪市 木下 幽王

しんきくさい妻を今日だけ叱るまい

病み果ての茶椀を投げる意地もなく

医者が手を放してもホラまだ生きてるよ

電光石火ボチが雑種をはらんで来

出雲市 尼 緑之助

不朽洞会総会に出席して

師を訪えば慈はひとすじに淡々と

師の訓話そこに不朽の作家群

緑雨氏へ

あいさつはやあや童顔の恋人よ

故郷へ赴任親類の多い事

前任地からもう酒くせまで知らしてい

鳥取市 杉 谷 湖山

年とって涙はもろきものと知り

切れのよき汚職と知らず女惚れ

真相を語ればさわる人があり

京都市 大鶴 喜由

夜の膳テレビの前に運ばされ

湯の山のカジカに妻も寝たろうか

尼崎市 小林 文月

ハッピーエンド他人ことながらほっとする

大阪市 富岡 淡舟

思い切り血を吸えやせつぼちの蚊よ

呉市 林野 魅光

屋敷と夜勤下宿で入れ変り

別嬪ですよとアンマに教えられ

岡山市 服部 十九平

漫画本返事しいいまだめぐり

豊中市 足立 春雄

百科辞典子の質問は書いてなし

熊本県 有働 菜春

十二月エスカレーターへつんのめり

除夜の鐘ソファーで聞く身地で聞く身

家主さんの小言出る程に子は育ち

又嘘をつかねばならぬ程に墮ち

広島市 山田 季賛

月見草旅の車窓を楽しませ

バタ屋でもよいと都会をあこがれる

大阪市 山本 葉光

札束をボンボン数える色眼鏡

倉敷市 梶原 一善

妻も娘も同じ意見で酒をせめ

見栄捨てて老眼鏡を買いに行く

岡山県 田村 藤波

寡婦屋根に立って台風の後始末

年賀状鬼籍に入ったのが二人

岡山県 岡田 夜潮

整然と足袋をたたむも女なり

聞かされる義務なし末座振り合い

玉島市 白井 三林坊

老眼鏡はずし毒舌冴えてくる

労働者農民諸君の中に僕も居た

茨木市 下山 清潮

テレビにもあいたか息子フラフラ

酒がへるへるだけ日日たっていた

岡山県 本田 恵二朗

年なれや競争意識燃えたたず

硯する音も秋は秋の音がして

御先祖の位牌焼く程に信じ切り

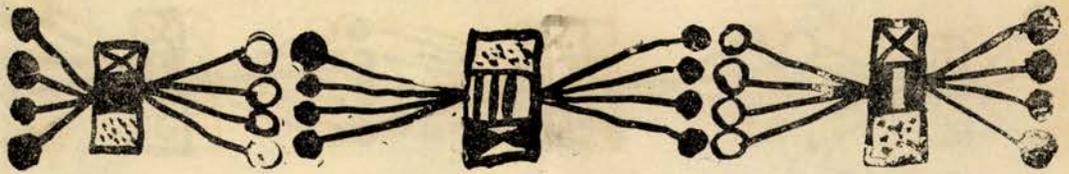
鳥取市 森本 法泉子

コンクリーの池にも蛙がとんで呉れ

板前の用事高下駄履いて出る

尼崎市 藤井 春日

電気釜床から届くとこえ置き



フラフープどれ父さんに貸して見な

味つけはこうよとおすしの返しが来  
飲め飲めと飲ませて妓に噛みつかれ

鈴之助今日は片袖ちぎって来

岡山市 津田麦太楼

鶏三羽放し飼して四面楚歌

鉄の手にギター哀れや暮の街  
モーニング貸して一升届けられ

堺市 高崎雄声

花魁のかんざしに似た曼珠沙華

大阪と知らず鳴いてるくつわ虫

島根県 藤井明朗

仲人へ賀状俵せそうにくる

岡山県 永松東岸

秋の浜我が足跡の外になく

姑一人僕等と別なとこで刈り

さいそくもされず元日寝ています

看護婦に聞えるようにあくびをし

出世型ベコベコしたり威張ったり

倉敷市 野田素身郎

十一月五日結婚

三々九度思えば水い恋でした

共稼イチニイサンで二人起き

大阪市 木村十悟

炭はせる音もさむ夜の風ぶつ詩

大阪市 伊達堰子

裸の大将

まだ一人花火の済んだ空みつめ

カサブ山王町

麻繩のつながりどっちが刑事やら

大阪市 不二田一三夫

拾い屋のあれが喧嘩か無気力な

新理事長土井文輝氏

大政の気っ腑で一家よくまとめ

兵庫県 酒井ひか平

酎薬飲みましようよと彼女酔い

たこ梅があった跡やと懐しみ

質流れ買う楽しみの小金持ち

真打になれずつなぎで四十年

宇部市 津秋六花

仏間から亡夫と話す声もれ

大掃除又古下駄をしもう妻

珍らしく今日は殺しの記事がなし

神戸市 野村初甫

口許からシスターボーイ汗を拭き

一目見て水商売の女にし

唐津市 新岡回天子

同型で危急の輸血またとられ

稲子などいない田圃も淋しすぎ

岡山県 池田古心

菜ッ葉だけ喰うて稼いでどうする気  
天気予報嘘でありたい日曜日

東京都 石居高志

飲む暇があって日記はほっとかれ

閉店へワルツの足がふと乱れ

人間の条件

敗戦を未だ売物にして稼ぎ

松江市 勝谷山川児

日曜になると釣れない風が出る

社長の出る会議は直ぐにすみ

大阪府 早川清生

父母の愛薄く他郷で早婚し

開拓地夜を詩吟の声流れ

欠食児父の働くとこ知らず

大阪市 武部若菜

奉公をしていた頃と過去にふれ

あまりにも割切っていく女つめたし

斗争の写真うるさし秋なのに

堺市 辻圭水

鐘紡を例に組合まるめられ

決算の結果は平の罪となり

あの時の酔態写真にまだ残り

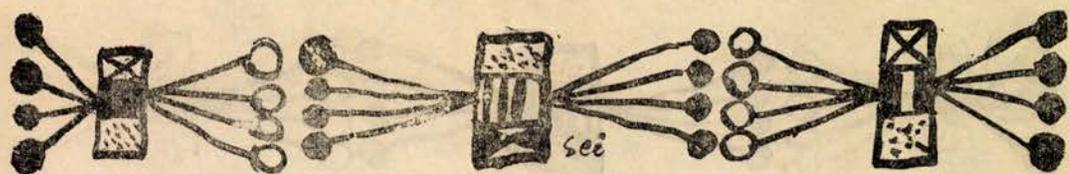
加賀市 中松恒雄

もう癒りましたと医者を変えており

死にたいと言うのへ返答口ごもり

大阪市 児島与呂志

恥知らぬ顔でサンシー買うて出る  
西宮市 小浜牧人



くもりなく澄む寶石へ気を晴らし

すぐ金に見積る癖も小商人

重役も屋上へ来てフラフラ

西宮市 菱 田 満 秋

散りもせずいたら鶏頭ひきぬかれ

ゆめはゆめ貰うてくれる人に嫁ぎ

兵庫県 前川 左文字

同型の服を背屋で見た自信

おかしいと見たら温泉駅で降り

先生ボタンがちぎれかけてます

煙草銭だけを持たしてまだ嫉妬

岡山東 池上 知恵美

胃の悪い父に豊作手伝われ

大阪市 橋高 薫 風子

木枯しに洋菓子子の灯の美しさ

日めくりを四五枚残す都落ち

除夜を聞くひとつの旅を終えしごと

下関市 中村 九呂 平

求人欄俺にショベルを振れと云い

求人ポストうどんの箸をとめ

奈良市 宮 口 笛 生

早いもんですなと子供の年を聞き

アクビ感染老妻と笑い合い

アベックを見て見ぬ振りすエチケツト

大阪市 西 川 晃

茶柱が税吏へ出したお茶に立ち

人格者だすとバタ屋が褒めて呉れ

冬の海自殺の覚悟崩れかけ

釜ヶ崎風景

仁義切るやくざへ夜の霧流れ

名古屋市 野 田 一念

飯焦げているのに妻のフラフラ

病人のリンゴを孫が平らげる

弱りめに崇りめ結婚詐欺にあい

岡山市 林 葵 丘

仲人へ豊作の田も見せておき

バラ垣へ下手なピアノの音がもれ

邪恋とも知らず岩風呂湯があふれ

神戸市 仲 どん たく

喪章を先は二号へ見せに行き

重役はゴルフ僕等はフラフラ

エスカレーターの上を走って何買いに

平田市 久家 代 仕 男

豊作に惰農の鎌もいそがしい

表彰をされ住みにくい世と覚り

ヘクタール結局坪で駄目を押し

外交の小火のあったも見のがさず

大阪市 大 谷 月 都

近道をするのが見えるビルの丘

法隆寺脱足になるも心地良し

岡山市 江 国 幽 谷

筆が云々墨が云々金釘流

岡山市 光 好 陽 子

露路裏へもうやって来たフラフラ

制服を呉れる勤めを羨まれ

西宮市 河 相 すゝむ

豊作の野辺を特急ひた走る

貫ったにはあやしいネックレス

西宮市 野 呂 鶴 汀

一本は女将餞別代りなり

独身で通すは妻を愛してた

許さんも許すもないと父は折れ

西宮市 樋 口 舟 遊

大いまずけどと留守居をたのみに来

帰化長し松の手入も趣味のうち

須磨水族館

水族館鯛は気象に瘦せている

新潟県 高 野 む じ な

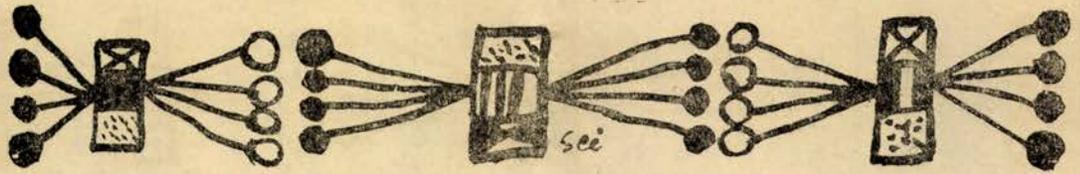
知事賞に知事の知らない品並べ

電気器具売場見に廻る恋

ビワ湖長命寺

八百八段やめて下からおがんどき

大阪市 欄 蘭



大阪市 石倉旅風

道学者何か言いたいフラフラ

絶対は生者必滅ぐらいかな

フラフラ 智能指数をまた下げる

大阪市 魚住満潮

大三十日一万円が未だ出来ず

もう風呂へ行くことだけが残るのみ

かしわ喰次第酒呑み次第胃袋あわてたり

堺市 田中狂二

これが道徳教育ですのと参観日

大阪府 林昌男

美人は得だなあ風邪にも見舞来る

予約席どやどやと来て飲み始め

夕焼の色に染って秋の牛

篤農の一人背広が似合いだし

倉吉市 大前鳴恍

説伏に来て商売もひとくさり

母の座としておくれまい読書する

顔貸してやった月賦を払わされ

伯父の死

吾典のベースを叔母に聞いて見る

分家分家分家葬列の長うなり

神戸市 傍島静馬

いつまでもママが放さぬフラフラ

最負のチーム勝ったと云うて飲んで来る

右側の通行僕とボリスだけ

大阪市 杉原吟女

しゃべる事無うなったのにまだいなす

脱いだもの畳んで寝るも母ゆすり

等筒市 木山遠二

日日好日裏から見える空もよし

老の坂持病を語る友が出来

自惚も自信も減ってゆくばかり

大阪市 中谷ハナ子

後晴れで父さん傘を忘れて来

ハネムーン座席は楽しそうに混み

大阪市 平沢保美

物を買う快感お釣忘れて来

天然バターだよとボーナス帰って来

特急で仕上げましたと手を抜かれ

職探し今日は三本立にいた

あんだあんだと呼ばれて葉書き損じ

同舟近詠

須坂市 高峰柳見

薄給へ仲人共稼ぎをすすめ

末っ子の年へ定年すぐに触れ

聞き上手腹に一物抱いて居る

弔辞読む声に合わせるすすり泣き

終電の客に売店急かせられ

和歌山市 秋月宏方

何が悲しい牛の大きな眼に涙

終戦後陛下背広がお好きです

大阪市 石田沐天

その上を法まで変える嚇しよう

流行に遅れてならぬ袋着て

婉曲に敬遠される女子大出

結婚を考えなけりゃいい女

今治市 長野文庫

十二月うつつはすでにうちぢし

前以て飲まされて居る許可の判

左遷だと記者知って居て知らぬ顔

原案は英語布告は日本語

今治市 月原宵明

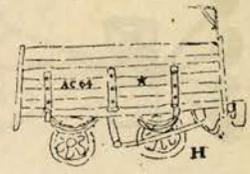
フラワーブ荷物に余る子煩悩

現実是指輪どころか指サック

出戻りの女となって酒がいけ

社旗持ってお若いのが走らされ

大阪市 橋本緑雨



# 年賀状に見る 新年吟

北川春巢

元日だ米ソのことは忘れよう

路郎

これは昭和三十年の路郎先生の新年吟である。国際関係を疑にしたこんな人もあるにはあるが、終戦後今年に既に十四年、人々は平和に慣れて来た。ことさら戦争を考えまいとしていることも事実であるが、平和になるにつれて年賀状のやりとりも盛んになって来た。生活簡素化とか云って年賀状の廃止を説く人も多いが、現実には官製年賀はがきの発売枚数も年々増加して、今年七億七千万枚とかいふことである。その他に私製はがきの印刷もあるのだから大した数である。

川柳人の年賀状もその数に含まれていることは勿論であるが、川柳人としてはただ単に「應賀新年 一月一日 本年相変わらず」だけの年賀状では少し寂しいように思える。その中で「一、二句をのべて、たまたま一回しか交遊をしない親戚、友人にも自分の趣味を知って貰いたいと思ふのは当然であらう。」

私は先を意味で年々になつていく自分の心境や家族の様子を句に托し、通信することにして、川柳の友人へは雑題の上で賀詞交換をしているので、私の年賀状の句は余りお目にまつてはいないと思うが、学校関係の友人や親戚にはこれが比較的評判がよい。

知の上である。「生命ある句を倒れ」なセツトにされる路郎先生から見れば、年賀状を印刷する前の晩に一夜奮りで作った、しかも私の家宛に送る句が、生命のないのは當り面である。年賀状に落款の名前を列記してあめいめいの年合を書いたりする人もあるが、年賀状の使用はそれだけで果せているとしても、それでは川柳人としては余りに卑劣に思える。そこそこの十文字で試めば、それには一寸面白く思つて貰ふらしい。従つてこれは川柳人の余技だと思つて頂きたい。

## 飲んで寝るだけ不惑のお正月

春巢

「私も不惑(四十才)になり、お正月は飲んで寝ておきます。」という意味である。これで学校の同級生達は「相変わらず飲んでるな」と思つてくれるであらうし、平生往來をせぬ親類の事も「もうあの子が四十才になつたのか。」と思つてくれるであらう。また「親父に似てよく飲むんだな。」と思つてくれるかも知れない。

私はそんなことを考えながら、手書きの記録から川柳人の年賀状の句を拾ひ出した。やはり毎年恒年の年賀状の句をのべた川柳人がかなりあるのである。それを分類して見ると、

- 一、ともかく目出度いことを詠んだ句
- 二、その年の干支にちなんだ句
- 三、その年の御題にちなんだ句
- 四、作者の心境、家庭状況の報告の句

「初日の出」とか「初詣」とか正月らしい言葉を使った句であるがこれは毎年のことでマンネリズムに陥るおそれがある。それも新春になつてからの実際の体験から出た句ならよいのだが、前に書いたように年末の感じだから、なおさらであらう。

## よいことがありそう晴れた三カ日

古方

この句など一寸頂けると思うがその三カ日が若し雨だったら句の感じが出ないことになる。

## 初笑い酒がこぼれるのも言わず

緑雨

お年玉ペリン／＼の紙幣を折り

## お年玉ペリン／＼の紙幣を折り

娘句楽

これらの句は、正月気分は出ているが、その年でなければならぬという特定のものはなく、言わば既製品の句と云えるであらう。

## 初日の出

春巢

これは「初日の出」という言葉を使っただけのもので、要は「みな達者」という報告に過ぎないと云えるのである。

## 二、その年の干支にちなんだ句

句

干支というのは、十干・十二支のことで、暦の上で甲乙丙丁戊己庚辛壬癸(十干)と子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥(十二支)とを組合せたものである。干支にちなんだものは私製はがきやカレンダー等にも印刷され、ともかく目出度から

れている。今年己亥(ツチノトイ)の年である。イは猪のこと物であるから、猪にちなんで目出

度いことを詠みたいと思つても一寸詠みにくいように思う。野猪の如くに日記に書きしかな

路郎先生著「川柳とは何か」に「作者は、新年を迎えんとす。」と前書して、この句を作ったとあるが、これなど今年の年賀状に書きたい句である。

猪の句の年賀状は手許にないがここ数年間の干支の句を並べて見よう。

辰年(昭和二十七年)辰は想像の動物であつて竜とも書く。

竜頭蛇尾となる一年の計を立て

竜の字の風大空でいきまてる

巳年(昭和二十八年)

初日の出海へ微笑む巳の生れ

ねっちりと貯めて巳年にあや

らん

これらはただ「巳」という字を使っているだけで、「巳」以外の何であつてもよいように思える。

(巳年生れはよく金が貯まる、と易者が云っているのかも知れぬが易のことは私はよく知らない。)

或は作者が巳年生れであるため、その年に當つて特にこんな句が生れたのかも知れない。

午年(昭和二十九年)

闘病十年この午歳もねてこまそ

初荷引く馬もめてたい足づかい

今年こそ馬の如くに雄飛せむ

若駒の嘶き初日あたたかし

山雨楼 鞍馬 摩天郎

HER BLADE SAFETY RAZOR BLADE MARK 100'S FEATHERS

おひげ剃りはやっぱりフェザー

フェザー剃刀

謹賀新春

鳥取川柳会一同

川柳雑誌社鳥取支部

鳥取市東灘区本山町 森三九八

神馬嘶く元旦の朝未明 淡舟 葉光  
 午は馬のごとで、親しみ易い動物だから沢山句が出来ている。山雨樓氏の「午歳」の句は午歳でなくともよい句で、ただ年頭に当り決心を詠んだ句である。  
 未年(昭和三十年)未は羊である。  
 純毛をほころ羊まうらやまず 葉光  
 万有一新未の歳の酒掬まん 小松園  
 平和そのもの絵になる位置に寝る羊 點平  
 申年(昭和三十一年)申は猿である。  
 三猿の猿まは蓄う四方拜 摩太郎  
 三猿の消極性に鞭を撃つ 葉光  
 酉年(昭和三十二年)酉は鶏である。  
 おらが春東天紅を誑いあげ 香林  
 初詣で一番鐘を聞いて起き 無鬼  
 金持ちになれと一番鐘が鳴き 天真  
 戌年(昭和三十三年)戌は大である。  
 犬小屋のねわらの下にも宝船 古方  
 おらが春犬が座敷へ上って来 白木  
 野良犬の歳定年の歳となり 貴山

最後の句は、犬の年を野良犬の年だとして、今年で定年になるのを呪う心持ちが詠んであり、犬年の句としては個性が出ていると思う  
 三、御題にちなんだ句  
 御題の句については、かつて路

郎先生が「川柳雑誌」の「続川柳講座」に書かれたことがあるが、要するに御題は「歌」の題であった、たとえその題で作句しても名句は出来難いことを説かれていた。御題で作句しようと思えば、時間的には随分余裕があるのだが私など時間の余裕がありすぎて却てその題をすら忘れてしまっている。年賀状に御題で作句されてしまうことも多しに思う。  
 「希望の船出」(昭和二十八年) 少々の荒れもめてたしよよい船出 伍健  
 日本の船出暦の一頁 紅樹  
 惜しみなく出舟に昇る初日の出 瑛二  
 四、作者の心境、家庭の情况等 報告の句  
 この範疇に来ると生命ある名句にはならないとしても、はじめに書いたように個人的には大いに親しみが持たれ、年賀状の役目は一段と果されたことになる。  
 うら・うら・うら・邊暦という歳の朝 生々庵  
 この句は生々庵氏の昨年の年賀状の句である。この句はこの年しか通用しない。だがこの句によって、氏が還暦を迎えられたこと、また「うら・うら」と大愛御機嫌のよいこと、など読む者に分かって来るのである。  
 四十七になっても正月よろしおま 葉

と、氏を知る人には「やっつるな」と微笑まれることと思う。  
 三十の新春運勢を信じまし 笛生  
 という句もある。  
 娘を一人嫁かした春の静かすぎ 紫香  
 知人、親戚一人々々へ娘が嫁った通知はしなかったかも知れぬが、この句を読んだ人達は紫香氏合嫁の御結婚を知るであろうし、その後の家の中の様子なども想像出来るであろう。またその三年後だが、長女次女嫁かした春の酒甘し 紫香  
 という句を見れば、次の娘さんも嫁かしたことが分るし、「酒甘し」で、紫香氏の心境も察せられるというものである。  
 麗蘇の香もちがう今年のお元日 博也  
 子の名前大きすぎてるお箸紙 博也  
 箸紙を子がくしゃくしゃにしてしま 博也  
 第一句は博也氏が結婚された翌春の句、第二句はその翌年、子供が出来てまだ小さい時、第三句は子供がそろそろやんちゃをしはじめたそのまた翌年、博也氏が子供の成長を如何にも楽しんでおられる様子が句にあふれていると思える  
 元旦の空の深さよこの国に住む 水客  
 元旦を茶の間で祝う老夫婦 香林  
 ひめくりの厚さ何やら出来そう 月九郎  
 もう年は言わないことと正月 多久志

はり作者の心境やらその家庭内の情況やらを詠んで、新春を祝う気分を充分に伝えている。また合成酒講和の春を酔い切れず 十九平  
 オキユバイド取れる今年の注連 修三  
 のように、講和条約調印の年(昭和二十七年)を祝った句もある。これはこの年でなければ通用しない句である。  
 以上手許にあった「川柳大版」及び「川柳烏ヶ辻」から句を選んで並べて見た。私の云いたいのは(くり返しになるが)、川柳人はやはり年賀状に川柳の一句位いはものして貰いたい、ということである。そのサンプルをお目につけた次第であるが、どの種類を選ぶかは勿論作者の自由である。だが月並みなお祝いの句よりも、個性のある自分の身辺の様子を知らせることに主眼をおく方が親しみが持てるように私には思えるのだがどんなものであろう。句の生命という点では殆んど云うに足りないにしてはそれでもよいのではあるまいか。

これは四十七でも八でもよいのだが、この句によって葉氏がこの年四十七才になられたこと、また正月を如何にも楽しんでおられること、氏を知る人には「やっつるな」と微笑まれることと思う。  
 三十の新春運勢を信じまし 笛生  
 という句もある。  
 娘を一人嫁かした春の静かすぎ 紫香  
 知人、親戚一人々々へ娘が嫁った通知はしなかったかも知れぬが、この句を読んだ人達は紫香氏合嫁の御結婚を知るであろうし、その後の家の中の様子なども想像出来るであろう。またその三年後だが、長女次女嫁かした春の酒甘し 紫香  
 という句を見れば、次の娘さんも嫁かしたことが分るし、「酒甘し」で、紫香氏の心境も察せられるというものである。  
 麗蘇の香もちがう今年のお元日 博也  
 子の名前大きすぎてるお箸紙 博也  
 箸紙を子がくしゃくしゃにしてしま 博也  
 第一句は博也氏が結婚された翌春の句、第二句はその翌年、子供が出来てまだ小さい時、第三句は子供がそろそろやんちゃをしはじめたそのまた翌年、博也氏が子供の成長を如何にも楽しんでおられる様子が句にあふれていると思える  
 元旦の空の深さよこの国に住む 水客  
 元旦を茶の間で祝う老夫婦 香林  
 ひめくりの厚さ何やら出来そう 月九郎  
 もう年は言わないことと正月 多久志

以上手許にあった「川柳大版」及び「川柳烏ヶ辻」から句を選んで並べて見た。私の云いたいのは(くり返しになるが)、川柳人はやはり年賀状に川柳の一句位いはものして貰いたい、ということである。そのサンプルをお目につけた次第であるが、どの種類を選ぶかは勿論作者の自由である。だが月並みなお祝いの句よりも、個性のある自分の身辺の様子を知らせることに主眼をおく方が親しみが持てるように私には思えるのだがどんなものであろう。句の生命という点では殆んど云うに足りないにしてはそれでもよいのではあるまいか。

以上手許にあった「川柳大版」及び「川柳烏ヶ辻」から句を選んで並べて見た。私の云いたいのは(くり返しになるが)、川柳人はやはり年賀状に川柳の一句位いはものして貰いたい、ということである。そのサンプルをお目につけた次第であるが、どの種類を選ぶかは勿論作者の自由である。だが月並みなお祝いの句よりも、個性のある自分の身辺の様子を知らせることに主眼をおく方が親しみが持てるように私には思えるのだがどんなものであろう。句の生命という点では殆んど云うに足りないにしてはそれでもよいのではあるまいか。

安産のために

ウケケツ川柳会

大阪通信病院

岸南柳

大阪市阿倍野区天王寺町 五一ノ一八 男前製造所

不二田一三夫

池戸 桃村 賀来 定  
 市場浸食子 仲谷ハナ子  
 生越 正徳 榎本 露見  
 乾 静夫 真野 康彦  
 橋本 幸男 小沢 史葉  
 半田 夏生 足立 春雄  
 西口 弘 木村 喜男  
 西辻 竹青 北川 春葉  
 尾崎 方正 木谷 竹莊  
 小野木凡平 森下 愛論  
 若林 草右

ピタミンB1入小粒 五〇〇錠 二〇〇円  
 ピタミンB1・ピタミンB2・A・D・鉄・配合



# 異質といふこと

—新川柳の明日に寄せて

## 東野大八

ある文化人の集りて、若い短大の講師である某君が

「川柳界というところは、多分に教祖的な師弟関係が根づきよいんだね、もっともこれは俳句界への話にもつながることだがね」

と至極マユ的な眼ざしで問いかけてきた。教祖的なのという点の具体的事例として、彼は地方柳誌の

表紙に、その流派の指導者のお筆先をうやうやしく押し頂いている点を挙げた。こうしたことから一とき川柳に関する話のあれこれが続いたが、並居る人々の一致した意見は、俳句より更に一段と遅れている封建的な世界は柳界である、という結論になった。

川柳は文学か、という主題はわれわれ柳人にとっては論外の既定事実だが、この肯定にはどうしてその環境づけられた分野においては疑問が残る。まず柳界伸張の基盤をなす柳誌について述べてみたい。同人誌には大別してつぎの四つがある。

A 一つの主張や主義をかかげ

てそれで団結したもの

B 一人の有力な指導者の能力の下に一流派を形成して集るもの

C 一つの川柳の場として社交的同好の士の集りとするもの

D 何等かの個人的意図に基いて出されているもの

この四つのグループを味討すると、それぞれの立場や傾向が隠されて興味深い。作句意欲の是非については、いずれのグループに属しようとして問題ではない一種のセクシヨナリズムで固ったAの場合は、最も意欲的な作句活動をそそって止まないが、その鋭角的なイデオロギーは、ことごとくにBやCのグループと対決する必然性を持っている。しかしCはBに較べてその抵抗は少い。なぜなら、Cは川柳人のロータリークラブ化した傾向が強いからである。Dに至っては、売名的な、かつ商業的な、またはP R的性格を帯びているから、一応柳道の域から外

れている。A、B、Cの共通点

は、川柳を文芸としての解釈がつきまわっているが、Bの指導者流には、多分に封建的な因縁関係があり、強力化した組織においてはそれが一種の官僚臭さえふくんでいる。最も一指導者流の中にも、清新な本格川柳の意図を奔放にとり入れた寛容さで臨むものもある。けれども総じてBとCには、新しい文学的な感覚には躍動性が

欠いている。もっともAのグループのみが、そうかといつてその面での花形では決してない。逆にそのイデオロギーの厳しさの故に、

新川柳としての文学価値をそう失している向きも少くないのである

ここで問題は川柳は果して文学か、という要点に触れざるを得なくなってくるが、結論を先に取出すなら、BCよりAがその意欲的な点においては一步優位に立っていることは否めない。そこでこの稿の最初の部分に還るわけである

いま文壇では、発らつたる新人たちの世界である。石原慎太郎、大江健三郎、開高健、有吉佐和子など二十代作家の天下と観ても誤りはない。奔放不羈、明快率直な彼等には、文字通り「新風」の名がそのままあてはまる。古風な観念的伝統にくさり切った大衆が、この新風に髪なびかせて観呼する姿は決して忘却の彼方へつながらものとは思えない。文壇のロカビリーだ、とさる大家はそっぽを

向いて苦笑しているけれども、その苦笑の前に、そこにある「何か」を気づく必要はないであらうか。

この二十

代作家の持つ

新風は、年輩

のわれわれに

とっては異質のものだ

と榊葉英治は言っているけれど

も、私はこの「異質」という意味

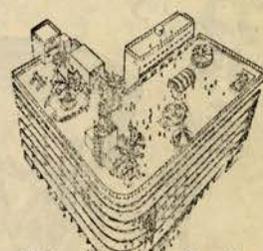
について考え及ぶ必要はないか。

そのかみ日本の文壇は、既成老

大家の膝下に踏まえられていた。

一例をあげると尾崎紅葉を中心

お買物は近鉄へ



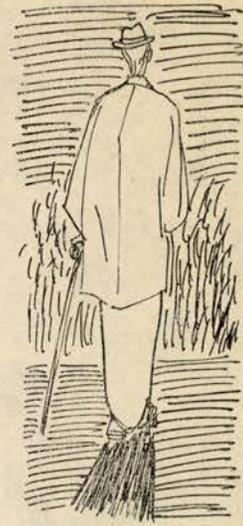
アベノ  
近鉄  
電話 8331

存在した硯友社は、大尾崎を頂点としたその過程でつながつていた。つまり、尾崎紅葉とその門下の一人につながつた直線の著者は「未熟」ということであつた。それを上昇するための努力は、尾崎の持つすべての型につながつていたのである。ここには意欲的な新風を呼ぶ文学はない。

あえて榊葉英治の言葉を借りなくとも、数十年前上京して流井孝作氏をインタヴューした際にも、このことがらに似た言葉が出ていた。つまり「ユニークさが新しい文学の生命となるだろう」ということ。この口裏には「異質もまた一つの道である」ということではないか。川柳にも、既成大家の一つの型や持味を放れて、奔放不羈の新人による、新感覚のエネルギーにみちた新川柳が生まれ出て、もよさそうに思える。川柳の新人中堅の中にも、他誌にみられぬすぐれた才能を鮮明に打ち出している人々が眼につくが、川柳もかつての日の若き路郎のほうれん草の句のとき、発らつたる意欲ある句が生まれてもよさそうに思えるのである。古き故土の中に芽ぶく生命は年齢的な若さに非ずして、みずみずしい情感をいつまでも胸のどこかに持ち続けることにちがいない。同人誌を越え、未熟の直線から全く外れた、異質の川柳こそ、今年から誰かからはじめられてもよさそうに思う。川柳があくまで文学であるならばである。第三者の川柳観も、決してこうなると無縁ではなくなるだろう。



# 句評リレ



大 阪 府  
從 教 員  
愛 知 縣  
岡 山 市  
岡 山 縣

川村好郎  
新岡回天子  
米沢 曉 明  
津田麦太楼  
永松東岸

## 川村好郎氏提出(川柳塔八月号) さびしさの塊りだとさ人

間は

一三天

あつさりと感じたままを表現している点が良い。下五の「人間は」が気になる。上五「人間は」と持っていて川柳にならない。と言つてこの儘では「人間は」で喉につかえる感じがする。「塊りだとさ」で救われている。この表現形式は堅くなつて味が失われ易いので、もっと具体的に表現されたいと思う。# 単帯恋のやつれをしめつける(千代美)のようにね。

回天子「あんまり、あつさり言い切つてしまつて豊かな情味にとほしいと思う。

うれしさの塊だとさ人間は

ともつてきたら、この句はどうなる、こんな意味で私はあまり良い句と思わない。

晓明「他動的なものを受身の形で

受けとめた「だとき」の表現に少からぬ諦め切れぬ然も捨鉢的な、更にいえば絶望的な悲哀をさえ感じさせる。ところで上五を「うれしさ」と置きかえられた回天子氏の惘眼とその御心境も十二分にうなずける。ところで「さびしさの塊りかしら人間は」と自動的な反省とすれば、ズルイ表現(ボヤケタ)かも知れないが余韻は残るんじゃないでしょうか。詩情もまた。

麥太楼「すて鉢なあきらめ、自己を突き放して嘲笑している、つまり自嘲の句と受取れる。

「だとき人間は」と表現の形式に異つたところはあり、些さか哲理めいたものを感得される。

うれしさの、と置きかえて見れば如何にもはらかな句にはなるが、しかしだとき「さ」がそぐわないように思う。

東岸「深刻な人間の感情を説んで

いるにしては余韻が薄いやはり具体的な表現でないからでしょう。

この様な句を読みますとすぐ路郎先生の「三階を降りてどこへ行く身ぞ」の句を思い出します。川柳はこの様な句境はあまり詠まれていない様ですが、それだけにあつさり一句にまとめられた事は学ばべきものがあります。岡山の九坡さんの句に「いつまでも河を見ている老夫婦」と言うのがあります。出しましたので参考までに申し上げます。

回天子「第一陣の批評は、あとから良い意見が出るので中々難かしいのですが、扱て「塊かしら」と訂正の意見が出ています。ですが、私も「だとき」よりは「かしら」が良いと思います。

「ゆううつ塊だとさ人間は」もう一度書き換えてみました。どちらにも変るのは句の固定性が無いのではないのでしょうか。

好郎「作者があつさりと作られたのだから、魚の小骨をせせるようにせずに、このままあつさりと思えば室外面白くうなずかれると思ふ。

晓明「とやかく申し上げてすまない気持です。各位の評で大いに勉強になりました。

麥太楼「「かしら」との御見解もあります。やはり「だとき」の方が言い得て面白いように感じます。

東岸「別に意見はありません。

米沢晓明氏提出(川柳塔八月号)  
かしこになりましたと馬鹿  
になつておき 谷水

女か奥さんか、平社員か、商売気からか、具体的ではないが、馬鹿に「なつておく哲学？」に達し得た悟りらしきものを感じる。然し、なつておきによって実はそれに徹し得ない人生の一面、凡俗の処世術の一つ等が伺えて、未練を蔵しながらも表現の淡々さがい

回天子「人生もここ迄修養をつむと大したものである、中々素直に謝るといふ生活は心では思つていても、さあ！となると心にもない意地が突張る、負おしみと言うものは誰にもある、此句は着想もよいし、馬鹿になつておきの下句の扱ひ方が特によいと思う。

好郎「晓明氏のお説の如く淡々と述べられているが、それだけ今一つ句意のはっきりしない所がある。上句に「かしこ」下句に「馬鹿」ともつて来ているだけでこれだけうなづける句を作られたのはお手柄と思うが。

麥太楼「好郎氏のお説の通り句意がはつきりしかねる、「かしこになりました」との「かしこ」がピンと来ない、「かしこまりました」ではないかとも考えて見たりしました。

東岸「一説した時私も「かしこまりました」ではないかと読み直された而しその点よりも男が言ったのか女性が言ったのか判然としな

いので句意が少し弱まっている様に思う道化じみたサラリーマンの自嘲が目につく。来るのではあります、さて奥さんか女中さんが言っているのだとしたら自嘲という事が考えられなくなってしまう。

回天子「かしこまりました」  
「かしこまりました」の二つのどちらか、はっきり分り兼ねるといふ意見が出ていますが、それはどちらでもよいと思われ、

「かしこまりました」は大阪商人のお世辞と考へてもよいし「かしこまりました」は妻の場合と考へてもよい、素直に馬鹿になり相手を率いて、儲けている商人根性(言葉がすぎる様だが)の上手な表現句であると思う。だがこの句の表現にも最近類句が出て来ている。  
好郎「かしこまりました」と  
「かしこまりました」と意見が出ましたがこれは、どうしても「かしこまりました」でないとよくない「かしこなりました」というところに自嘲的なところも出、下句の「馬鹿」が生きてくる。  
暁明「好郎氏の御説の通り。  
麥太樓「賢しこなりました、がやはりよろしかろう。  
東岸「一度は読み直した句でした。

○ 本松東岸氏提出(川柳塔八月号)  
事務的にテープで計る事故現場  
どんたく

感傷とは別に事故を起した当事者は、その記録や対策やらのため、現場を忠実にテープで計る必要もあるものでありましようが、それを事務的に言い切った所に作者の巧みがあり、非情な世相へのすどい批判がありすぐれた句と思えますが如何でしょうか。

回天子「職業意識と人間の感情は別物である。大ケガをした病人も医者は医療の方面から、これを診断して感情を交えないからよいので、近視者がクガ人を見る様な驚きや悲しみのみで見ているなら治療は出来ぬ。運転手が死のうが乗客が何人病院に担がれて行こうが事故現場の検証は後々のために正確に調査されねばならぬ。テープと言ふ一個の物が如何にも冷静な正確さを表現していて良いと思う。

好郎「事務的にテープで計り乍らも内心同情と哀愁を感じているにちがひなく、また感じて欲しいと作者は願っている。それもこの句の中に感じられて良い句だと思ふ。  
暁明「事務的という三文字がこの句の山であり、その具体物がテープである。冷厳な、そして神聖ささえ伺えるテープを事務的と表現こそしているが、このテープ一本によって、事故現場がありありと見えるようである。人の動きも、こつたがえした乱れ方までも。

麥太樓「前評者は至極好意的に見ておられるようだが、この句の川柳味は悲惨な愁歎現場を余所にボリスが淡々と、むしろ冷酷な態度で事務を遂行している。その皮肉を詠ったものと思えないこともないようです。

回天子「悲惨な事故現場を本来なら誰もが同情的であるのに、麦太樓氏の評の如く淡々と冷酷に現場を扱っていると解してこそこの句の生命がある様である。温と冷人面感情の両面を対立させてこそ面白い句になるのではないか。  
暁明「私もいろいろ申上げて事故をおこした様、皆さんの立派なテープで計られたあとを吟味させていただきます。  
麥太樓「別段に異見はありません。

○ 本松東岸氏提出(近作柳塔八月号)  
あじさいを日傘で抱いて  
歸つて来 千代美  
あじさいを日傘で抱くという表現は全くうまいし、あじさいの花そのものような佳人を想像させられ、足どりも軽やかにあふれているような気がさせられます。  
回天子「はっきり記憶にないが花を抱くと言ふ句は前に見た事がある。この山は「抱く」にあるので、ちょっと読んだ時には面白い句と思うが、着想が古いと思う。

好郎「千代美さんの句は毎月の雑誌からいつも興味を持って繰返したい。しとしと濡る雨のあじさいの風情はまことに良い。晴れた上天気より梅雨の晴れ間を蛇の目で効かせば一入情緒があふれましよう。とまれ、女性ならではの句でこの作者の句にはいつも魅せられております。  
回天子「皆さん本当に女性に親切である、醋評は私だけの様ですが、私は作者を意中におかずにこの句を見て、矢張り平凡だと思ふ。前置き(例えば美しい女性)と特別の感傷性をもって見直せば、本揚げの悪いあじさいを特に日傘で覆って来る女心のやさしさが分らぬでもないが、句が一々前置で批判するものではないから。

麻生路郎先生著

川柳とは何か

川柳の作り方と味い方

送 二五〇円  
三三〇円

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたものが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的であるその川柳がいかにかに革新し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27 振替東京29507

好郎―女性に親切なわけではないが、千代美さんの句は好きです。先に述べたように千代美さんのこの句以外に良い句があるのでこの句だけで云々するのは酷に思う。やはり女性に親切なのかしら。

東岸―千代美さんとは一面識もありませぬし、若い人であるかどうかも存じませぬ、がこの句からは若い女性が想像出来ると思いま

○ 友不遇衆議一決のむと決

「あいつは近頃さっぱり元気がないせどうだ一杯飲ませて元気をつけてやろうじゃないか」といった所で衆議一決したのである。

お互いに苦しいから友が一人不遇であってもどうしてやることも出来ない。せめて元気をつけてやる位のが精一杯だ。飲んでいるうちよくよしていても仕方がないと腹も据り一緒に賑やかに騒ぎ出して来るという寸法で面白いとこを擱んでいると思います。

回天子―すくなくともこの友達は可成り落ちぶれている、心境も悲親のどん底にあるのではなからうか、その友達を衆議一決する程、数人の人間が取り巻いてのんで呉れるだろうか、出世した友達の歓迎会ならば、衆議一決する程友達が集まる事は間違ないが、貧乏人

はあまり相手にしないのが人間の常である、句の良悪は別として私には句意に矛盾がある様な気がして頂けない。だが貧乏の友達をそんなにして慰め合うようなグルーブは私も欲しいとは思ふ。

好郎―不遇の友にすれば一杯飲ませてくれるより金一封が就職先を運動してほしいであろう。それもよく知っているが不遇とまでは行かずとも懐中皆さびしい連中ばかり。せめて一杯を飲みかわし元気をつけてやろうと。助けられるものも助けるものも不十分な点はあるが、その心づかいの感謝、友情が尊いのである。「衆議一決」が含蓄があつていい句にしている。

黎明―哲さんの批評につきると思うが、大したこともしてやれない。然しほつてもおけないせめての心やりながら、その微意を衆議一決と表現された所にユーモアを感じ、人情味も理解される。然し深みに於いてどうかしら。

麥太樓―前者の御評で尽きましよう。この句は私もかつて経験のある句で恐らく東岸兄も体験があるう？ 飲み仲間の友情がざつぱらんに出ていて面白い。不遇が他人事でなく我が身にもひしひしと迫る思いがします。

にして飲む事が主であるかはなんとも言えませんが、不遇な友もいける口を持つてゐる事を知つてゐる限り誘つて飲み乍ら我々で出来る事ならなんとかしらうじやないかという結末も出て来るのです。

回天子―哲さん、どうもいける口らしいので酒呑みに同情的であるが、私は下戸で飲む方に興味がない為かどうも膽におちぬ。「衆議一決のむと決め」の上句は友不遇でなくて「友出世」ではないかと思ふ。それなら衆議一決という派手な言葉も場面も想像出来るのだ

が。好郎―回天子さんの「友出世」とは面白いと思います。「うれしさのかたまりだとさ……」と批判された「友不遇」を「友出世」と変えて批評されるところ回天子氏のお人柄を察し得られる。どうも私はさびしい句悲しい句、に心をひかれるので気がつかなくつたが、「友出世」で衆議一決も通じるしまたかわつて面白い。しかし句の味は「友不遇」の方が深いように思ふ。

黎明―衆議一決……は恐らく多くて、四五人だらう……それをこの四文字に誇張した所にもユーモアがある。「友出世」となると、五人でなく……数多き友が文字通り衆議一決となるようにとれるのは私だけでしようか。だから不遇でも、出世でも解釈はそれぞれに

謹賀新春

中島生々庵  
中島小石

大阪市南区鰻谷  
仲之町二〇番地

○ 津田麦太樓氏提出(川柳塔八月号)

眞実のこわさが見えぬほど若く 古方

父親が見て伴の向う見ずな若さ一杯な振舞にはらはらしておるのでしょう。一面進取的な若さの、あふるる頼もしさに期待も大きく、ひそかにほほ笑む老父の慈愛に満ちた顔が髣髴とします。川柳塔巻頭の一句、古方氏の老練さに全く感心させられました。

回天子―若い者でなければ大きな事業は出来ないと言われられてゐるが、年をとって来ると若い者のする事は無鉄砲で本当に怖い。この句は、こうした意味をすばりと言い表わして気持ちがいい。老練な句とは、こうした句を言うのだと再読三読した。

- 南区医師会文化部
- 杏林川柳会
- 岩崎一伸
  - 大島葎明
  - 河村瑞川
  - 中島生々庵
  - 中島小石
  - 牟田一哲
  - 海野比呂史
  - 安岡珊枝郎
  - 山川阿茶
  - 平尾太希志

対して済まぬことと思うが、もしこの句の下に「古方」と無かったら果して私は名句として頂くだろうか。それはどうだろうか。それを見落してしまおう。古方氏の句と知って味えば流石はと感心する。私にまだ川柳を味う暇がないのか。町内の初段では王将の駒の動きがわからないのと同じかしら。東岸「真実」の代りに「偽り」という様な反対乃至対蹠的な語を持つてくるとどうなりますか。少々気になりました。そこであれやこれと色々上五に並べ立てて見ましたが、矢張り「真実」が一等坐りがよく落着くようです。そして最後に「真実のこわさ」の具体的解釈について大いに迷わされもいたしました。考えさしてもいただきませんでした。一読しただけではさりと見逃して仕舞いそうな句であります。が、真実の怖さを現代の若い人々に知らす事の困難、理論的には説明し得ても実際には年輩の人の感覚について行けないし簡単に割切って考え勝ちで現代の非情な世界が若い人には見えなないし若い人には若い人の考えがある訳で心配する程の事はないのかもしれない。而し現代の世相を考える時、痛切にこの句が生きて来る訳で、若い人への危懼と思いやりがこの句の底流をなしており、老練の一語に尽きると思いますが。

回天子「真実の」でも「偽りの」でも良いと思う、目的は「血気にはやる」若者を戒める句と思う。だが句意はどちらでも分るが矢張りこの場合「真実」のでこの句は生きている、私はこんな句が好きである。

好郎「皆さんのお説を承ってなる程と思いました。私としてはこれ以上に批評することはありませ

人。  
 黎明「回天子氏の御説へ共鳴し、駄弁をふるいましたナァ」。

津田麦太様氏提出

(近作柳梅八月号)

ニコヨン等歸りに見ても

一服し 矢寸志

芝生に寝そべったニコヨンを自転車の上からぐっと睨んで通ったのでしよう。所用を済ませて帰りに見てもまだ同じ所で一服してあったニコヨンの暢んびりしたアンコー仕事のスケッチですが、こう言う句材は巷にいくらも転じていても大抵見逃します。この句には作者の勤勞に対する所得の不満と言う様なものが表現された軽い佳句と思います。

回天子「ニコヨンの意術は誰が見ても目にあまる、通りすがりに、よく観察して面白いポイントを掴み得た句と思うが、ニコヨン等の「等」が少し気になる。もう少し「等」を上手に扱う法はないだろうか。

好郎「ニコヨンに限らずまだまだ働きが足らぬと自省する。八時間の勤務を船のように延してないだろうか。報酬は限度なく要求する。現代の世相を描いた句として一応うなずけるが、表現の上にも消化されないとある、今一度推敲すれば良い句になると考える。

黎明「確かに捉えるものニコヨン風景？香気質を捉えている、「等」は「遠」と複数を示している表現であるが、気になるとすれば、思いついて「ニコヨンの」とどんな複数の意味は通じる。さてどんなものか。兎に角、そこらでお目にかかるものをよい意味でスナップ式に捉えた眼の鋭さに教ええられる

ものが多い。

東岸「表現上の巧拙は別としまして私には非情な句と思われまます。八時間を船の様に延してと前評にありますが、その様な人達もいるにはいるでありましようが安日当でも役人さんがせられる仕事です。人員の適正な配置とか作業の能率化という様な事は恐らく度外視され、勢い作業意欲という様なものは起すすべもないのではないのでしょうか。勿論下には下のあることでそれ以下の生活をしている者もない事はないでしょうが、而しニコヨン生活と言えは最下層の生活を余儀なくされている階級であります。この人々に目をそそぐならば、作者に愛情のバックボーンが欲しいと思えます。好郎氏の句を引合に出しまして甚だ恐縮で御座いますが「桜なら櫻刑務所今見頃」という名句が御座いますが、これも一見非情な

句として感じていたので御座いますが、現在の刑務所なら桜の下で運動会もやり兼ねないとも考えられて、いささか救われるものがあると思えます。而し作者の意図がニコヨンの至極のんびりとした作業風景に引きかえ一日中追いまくられていて別に楽にならない生活を較べて軽い羨望を覚えた句としてならうなずけると思えます。

回天子「長く民生委員をしていて、失対事業も業務的に眺めて、この句は平易に真実を掴んでいると思う。「等」を「の」に置きかえるという黎明さんの意見には賛成である。

黎明「ニコヨンの」がよい。  
 (本稿担当・真鍋一颯)

川維八代支部  
 佐野ト占

久家代仕男

島根県平田市灘分町  
 一、八二二

新春賀謹

土井文蝶

大阪市西成区松通九ノ三二

川村好郎

大阪府東北郡高石町北四六五

西いわを

大阪市東住吉区琴津町七ノ三二



麻生路郎選  
北川春巢選

宿題にオイオイ困る父も老い 宇部市 上林 粗影  
 ああダムの村金は都会の灯に吸 れ 同  
 黒棒と同病であった怖れよう 同  
 利子貰いに低姿勢で行き 同  
 もう一息ノルマを責める虫しぐれ 同  
 石塔へ這入る順兄弟で話し合い 同  
 恋のなきがら兄さんの平常着 同  
 お祝いを云えば離婚をしておられ 兵庫県 永尾 永断  
 メンデルの法則通り酒が好き 同  
 インテリでした傍観者であった 同  
 豊作の自信隣りの出来も褒め 同  
 長い物に巻かれる夜を妻が起き 同  
 警職法反対  
 もやもやを肌で識ってるから怒り 同  
 二等車は性に合わぬか疲れが出 玉野市 伊原 明林  
 立ち聞きの自分の影に気が付かず 同  
 月給日匂いの違う台所 同  
 代読のふるえがとまる頃終り 同

滞納をせぬ同業が居て困り 同  
 下駄箱の隅で女房の靴が微び 同  
 暮れ残る小山羊へ一番星が出る 井和田市 内藤きさ子  
 フラフープ済むカツラで出る舞台 同  
 嫁の荷へモンベきつちり米どころ 同  
 香水も入れて家出の荷をまとめ 同  
 商才に長けて小唄も習い出し 同  
 降り続く雨へはっぴで飲みに出る 西宮市 山本 一傘  
 アベックへ歩調の変るパトロール 同  
 ひとり社を出て麻雀屋で出あい 同  
 D・P屋ふたりの夢をひきのぼし 同  
 朝刊を寝床で読んで飯が炊け 同  
 誰を待つあかりか夜中までともし 豊中市 石川ひさみ  
 山も秋恋も野菊の丘をゆく 同  
 よろめいて夜霧にぬれて戻って来 同  
 雨の音どこで逢ってるかと思ひ 同  
 大阪へ出かける用もない化粧 同  
 面接でしゃべり過ぎたと明るい子 岡山市 宗高矢寸志  
 故郷は雀の声透き徹り 同  
 意気込んで又麻雀のカモになり 同  
 始くことも知らずよく肥え と 笑ひ 同  
 とりあえずここへ被災地の視察 同  
 豊作の家山子笑った顔で立ち 証賀県 土守 蜻蛉  
 学歴をかくして下っ端に勤め 同  
 老夫婦いたわり合うて柿を食べ 同

謹賀新春

前田 伍健 <small>松山市真砂町二一</small>	月原 宵明 <small>今治市景川通一七八</small>	石田 沐天 <small>大阪市阿倍野区阪南 町西二ノ三三三</small>	長野 井蛙 <small>山口県防府市大字西佐波 合字幸地一三二六ノ一六</small>	橋本 緑雨 <small>大阪市東住吉区平野 西ノ町八三</small>	秋月 安方 <small>和歌山市今福東ノ町二二八</small>	虹川柳クラブ 新岡 回天子 <small>佐賀県唐津市新与町</small>	仲 どんたく <small>神戸市灘区高羽楠丘一〇一</small>	富士野 鞍馬 <small>京都市東山区清水四 ノ一七一</small>	長野 文庫 <small>今治市神明町</small>	武田 北州 <small>豊中市岡町南二丁目五二</small>	本田 恵二朗 <small>岡山県英田郡大原町</small>
----------------------------------	-----------------------------------	---	---	---	--------------------------------------	--	---------------------------------------	---	--------------------------------	-------------------------------------	------------------------------------





盲判貰うてベコリ袖カバー

パンアンドパンで独身の日曜日 具塚市

十年も米の値知らず療養し

不発弾のような肺で退院し

ゆるい坂もう息切れる肺活量

サックドレス着ていて鯨尺で云い 大阪市

あの時の晴着布田のガワになり

松茸のお札に浅草のりが来る

雰囲気に酔うたと幹事よろこばせ 熊本市

出世せぬ顔でたのしいクラス会

婚約もすんだ布田の襟をかけ

平均寿命延びて追っかけら 伊丹市

ぜんざいもビールも好 娘に育て

酔わぬくすり京都までの一時間

嫁く日まで古きミシンを踏 おき 西宮市

残業をするにも紅を引きなおし

同業のピラ新聞が届けてき

冗談に云って商魂抜け目なし 宮崎市

村の火事鐘はドライな音で鳴り

晩成を期する頭もとうに禿げ

優等賞待ってましたの返事ぶり 西宮市

膝に来たハエへ一茶の気にもなり

給料日カラのサイフももって出る

洗濯機も買わず夫の主義に添い 大阪市

あいの子は可哀想にと見て通り

同 護川 梢月

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

女工さんをお世話して

女工ぐち嫁しづくように喜ばれ

お客かと思えば道をたすねられ 竹原市

商人の主義をころした顔になり

凡人の野心段々小さくなり

二次会へおこぼれの無い顔が集り 小松市

流行へ五尺に満たぬ身を忘れ

お通夜の席で名刺を派手にまき

パチンコは儲けた話ばかりなり 枚方市

明月のだんごも淋し妻の留守

一番の苦手は母の目の泪

友情を世間が恋にしていまい 鳥取県

スクラムを組んで栄達望まない

イヤリングつけて世間をせ き 生

おみくじも新語を入れて見 たり 大阪市

葉牡丹の一株家を春にする

旅なれて靴に入れる味の素

十円で行ける故郷へも遠さかり 竹原市

子が逝ってからの念仏声になり

療養の湯からノロケの便りが来

大阪が嫌になつたはスリに会い 岡山県

非農家のががんで歩く農繁期

師を訪えばかどの焚火で き な さ れ

十代へ伯母の叱言がくどすぎる 宇都市

純毛のはずが小雨でペロンとし

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

謹賀新春

衣箱寺ノ内上ル

井ノ下晴芽

全

井ノ下秀徒

深草相深可

大鶴喜由

相國寺北門前

田中千潮

全

田中烏雀

山科西野山

竹松九角

全 川田西浦

柳本憲一郎

全 厨子原

小林亀一

全 西野山

平井絵丘

全 船橋寺

平岩司郎

小山東北池

本儀親生

弘津柳慶

山口県柳井市専売公社



録音のうしろでダムになるハッピー	同	病床の頼る夫へ肩を貸し	木下 一休
ベイトーベン聞き焼芋かじる娘等	石橋万古人	逢いに行く日の薄髪を撫でつける	同
菊花展入選閑人だと見られ	同	トラックに積んで失対さばかれる	同
観光地元は他所の町で飲み	同	失恋を忘れる読書とは淋し	川竹 松風
鬼婆が恐い嫁だとふれ歩き	筆坂 町人	祭の日かぞえて柿のしぶを抜き	同
誘惑をしようと手切金をとり	同	真面目とは別にドライな血も流れ	富永 健朗
ブラットの人を無視した水を撒き	同	好きな娘が着れば袋もよく似合い	同
発展の余勢社長の一ノ号さん	高田穂波子	交叉点違反見つけたらしい笛	河井 庸佑
仕事着で往けば売場のぶあいそう	同	幹事幹事とボーイのようがいい	同
独り身で気楽でしょうと他人様	同	嫁がせて見れば案じたほどでなし	河原みのる
夫の姓で呼ばれ内縁とも云えず	平田 実男	積み上げて眺める間なく米を売り	同
気に喰わぬ奴と肩組む程に酔い	同	まかしたら養子おどろく程うごき	木山 二路
仲裁が短気けんかが派手になり	同	二十四の娘へ早くも十二月	同
宝くじ買う金さえもなかりけり	中野三四郎	こんなこと速達にしてと腹が立ち	神田 豊年
太閤記読んでしまつて呼ぶあんな	同	たまに飲む洋酒焼酎党がほめ	同
仲人はプールのように折り返し	同	別れたと知れるよごれた服になり	今西 生菴
進んでる医学をほめて傷を見せ	西本 保夫	酒飲むなそれで診察料はとり	同
借金を断わる理由にまだ若い	同	地下足袋も揃えて呉れる嫁が来た	万仲 一進
母一人娘一人金種借りにくる	同	へそくりの一枚増え二度も読み	同
横綱の負けた活字の大き過ぎ	中橋川太郎	病床の妻の指図で飯をたき	藤本ゆたか
正月を待てぬ子供へ餅を焼き	同	耕耘機牛は横目で見て通り	同
日給になつて連休返上し	同	云うものは云わして置け	阿部たけし
引際を得てパチンコのおごい腕	吉田 凡茶	学歴は一行ほどです履歴	同
おぼれる時のワラ法律の相談所	同	エンジンのかかったよと笑い出し	宮川 珠笑
人様に見せる乳房でふくらませ	同	おもしろいとこは酔っている	同

喪中につき年末年始の御挨拶を御遠慮申し上げます 木村 十悟	<b>支 部</b> 伊 達 暎 子 (ABC順)	<b>須 崎 豆 秋</b> 大阪市阿倍野区旭町 三丁目一四番地
	不 二 田 一 三 夫 金 井 文 秋 加 藤 繁 雄 河 井 庸 佑 木 口 賀 峰 菊 沢 小 松 園 松 江 梅 里 小 川 恒 明 新 川 博 也 須 崎 豆 秋 高 鷲 垂 鈍 辻 川 喜 仙 山 本 葉 光	
<b>柳 雑 誌 社 阿 倍 野 支 部</b> 事務所 大阪市阿倍野区旭町2の110電64.2082 (木村十悟方)		



紅一点超ドライにて旅樂し 田辺市 室井八九寸

京都時代祭

カメラ持つ袴もあり京祭 西宮市 同

算盤をはじく女の指太し 西宮市 樋口 寿栄

病人に叩かれ安心して帰り 須崎市 同

水餅の水のごりて春近し 須崎市 高橋 蟠蛇

倅せはまだ飲めそいな老の春 大阪府 同

人気者にされてる給仕よく動き 大阪府 川口 白帆

保険屋も退社ベルには勝てず去に 加賀市 同

歩いてる走ってる皆喰うために 加賀市 斎藤 巖

もう選挙始まっているあの花輪 鳥取市 同

かるはずみした心の中うかばれず 鳥取市 岩田八文銭

石橋を叩き叩きで売れ残り 倉敷市 同

鶏ばらす指にきらめくニカラット 倉敷市 小倉美音子

山奥の旅行へバーマ念を入れ 大阪府 同

補聴器と携帯ラジオ感違ひ 大阪府 万代句念坊

知らぬ間に娘は指輪はめて居り 大阪府 同

はやら々なってお医者政治好き 大洲市 横田 放人

早寐すれば娘に寐おし頼まれる 天理市 同

江戸っ子も時には故郷がほくなり 天理市 岡田花奈女

恋知ってからお習字の稽古もし 西宮市 同

お守りを受けて新車の試運転 西宮市 富永 夢路

遠慮する膝へ半分酌ぎこぼし 大阪府 同

スト出来る会社となって首切れ 大阪府 石原 球太

立説で行楽プランねっており 鳥取県 同

父母を續いて失う二句

教訓も遺書も残さず父は死に 鳥取県 一生 無名

試金石にせよと母の死いたわれ 玉島市 同

先代の清物石が重たすぎ 玉島市 井上 旭峯

辛抱が大きな鯉を釣って見せ 大阪府 同

惜しいかな友の知性の朽ちたまま 大阪府 米浪進之助

菊人形太閤さんはまだ元氣 西宮市 同

押し売りと知らずお茶出す女事務 西宮市 酒井 丹譚

ニエースだけ聞きます留守の妻 大阪府 同

怖いヒゲ生えて米そうな警職法 大阪府 宮原 敏子

菊一輪活けて白足袋履き換える 青森市 同

愛の巢は婦唱夫随の釘を打ち 青森市 工藤 甲吉

幾山河越えて女は酌をする 兵庫県 同

大屋根が落ちた落ちも他家の火事 兵庫県 北山 越山

女子大を出て妹の子をもらい 大阪府 同

薄情な男の夢に目を覚し 大阪府 石井 伸生

叩き屋にふところ具合ののしられ 岡山県 同

景気よい焚火している建築場 岡山県 横山 一声

気前よう買うて払いの長いこと 堺市 同

世の中を香車の様に走りたし 堺市 吉本 善風

企画課がひまで黒字が続くなり 美弥市 同

傷口をなめなめ日曜大工がすみ 美弥市 安平次弘道

同

謹賀新春

笠岡市

木山 遠二

小浜 牧人

西宮市甲子園四番町

林野 甦光

余項 紅児

兵市吉浦中町二丁目

小林 山舟

水野 水茶

加納 山茶

橘高 薫風

永藤 弥平

菊田 いさむ

小池 しげお

竹内 圭三

村上 ゆずる

黒川 紫香

戸田 古方

川柳並木会

木山 遠二他十三名

岡山県笠岡市山口

村山 静修



とれとれの鱒庶民の有難さ 西宮市 青山 町子  
 うなずいてくれたが頼りない男 宇都市 鎮波 翠月  
 へそ曲り風邪を引いき寝てしまい 兵庫県 斎藤たけお  
 てっちりも食べて老妻元気なり 西宮市 白石 由美  
 欲深が豊年食之とぬかしたり 大阪市 安並 十七  
 ハイヒール脱いで遠出の足を撫で 西宮市 三上 芙路  
 磯の香が好きとは女房気を合わし 愛媛県 河本南牛子  
 秋深み裸の鶏は霜をふみ 愛媛県 谷本鈍愚坊  
 母一人娘一人だんご月にあげ 西宮市 保西 岳詩  
 豊年を約束させた柿の敷 西宮市 村上 珠絵  
 蟻螂の斧おこわと逃げてやり 豊中市 林 参無子  
 尺貫の秤は店の隅で錆び 七尾市 松高 秀三  
 友情に包まれ真人間となり 西宮市 大江 秋月  
 演説のようにゆかぬ始球式 大阪市 松谷 政俊  
 どう家具を並べ変えても四畳半 見島市 伊丹柳瓢子  
 藩公を又宣伝にして銘菓 大阪市 保田 華甫  
 お粗末と云うお土産に礼を云い 竹原市 藤井 吞竜  
 犬猿の仲とは知らず枝が延び 大阪市 小畑 東二  
 編棒の動きラジオに合うて 西宮市 鶴飼 鮎子  
 秀才はまだ詰襟のクラス会 出雲市 山本 朱紅  
 麻雀で疲れた勤労感謝の日 愛媛県 松本 忠三  
 お休みですかに定年でれくさし 鳥取県 魚崎 漫歩  
 新人はマークをされぬ強味持ち 西宮市 網元 慧星  
 米櫃がからっぽ寐返りばかり打ち 金古市 渡辺 弘介

フラ・フープの胃をケチがつき 大阪市 三栗 夜城  
 柿むいてくれる母という故郷 今治市 越智 義夫  
 銀行に友ありしかも貸付課 堺市 沢 柳琴  
 稲刈りのかんだ腰へ日が落ちる 堺市 武田軍治郎  
 泣き落しに行くよカツカツ靴が鳴る 大阪市 碧 道二  
 結婚してしあわせそうな紅のいろ 西宮市 渡辺 勝子  
 スクーター買えば成功したと云い 鳥取県 土江 基保  
 魚屋の昼寝に蠅がほし 下関市 宮藤 慈雨  
 柿一つならぬ落葉を今日も掃き 岡山県 杉本たつよ  
 菊日和女よく食べよくしゃべり 西宮市 末沢 友子  
 黍刈って入日まともに拜むなり 金沢市 桐谷 紋六  
 女事務入用女塗って行き 豊岡市 佐内 隆文  
 家人は留守庭の葉鶏頭 山形県 菊地 白葩  
 街中の腰が揺れてるフラ・フープ 大阪市 半田 夏生  
 子の頭おさえて親が礼を云い 宇都市 田原 緑豊  
 特別の記事に眼鏡のほしい年 西宮市 古原 凡平  
 外孫の母で乳房を見せしてくれ 河内長野市 森本黒天子  
 倅せな日をお天気も気をきかせ 京都府 塚脇 笑太  
 にせ物を作るにおしいうでを持ち 西宮市 豊島砂牡丹  
 金魚売り童宮城もかついで来 宇都市 品川 粹歩  
 スポーツはアメさんの真似ばかり 奈良県 内海 暁夫  
 病室に折鶴ふえて病みつづけ 兵庫県 藤井雅佐女  
 どたん場で短気おさえる歳になり 金敷市 藤岡 萌芽  
 主人留守の昼は茶漬で済しとき 西宮市 山岡 半歩

川 雜 淀 川 支 部

大阪市東淀川区十八条町一丁目二

武部 香林  
 若本多久志  
 西森 花村  
 坂田東洋男  
 志水 礼司  
 早川 清生  
 武部 若菜  
 岡部三十郎  
 小林 文見  
 小島さぎす  
 別所 灯子  
 木村 水堂

大 坂 形 水

大阪市東区糸屋町  
 一丁目二

杉 谷 湖 山  
 鳥取市職人町

竹原川 柳 会  
 広島県豊田郡竹原町  
 田 村 藤 波  
 岡山県英田郡美作町  
 湯郷五五一

# 漢藥論と

## へニシリソリン醫藥論

—大村沙華「現代川柳批判」を反駁して—

高 鷲 亞 鈍



私は今年号の稿を進めるに當つて、昨年来より持越している詩川柳理論から「現代川柳」批判を陳べようとしている。

惟うに昨年号の新春号で、「麻生路郎の川柳人的立場」と題して、路郎師が三十二年度の五月号の巻頭言「一行詩人」に言及したことから端を発し、二月号、五月号、九月号より十二月号まで、その折り折りの主題に補遺しつつ、多年抱懐していた現代川柳理論を展開したが、何分断片的な発表であった為、相当の誤解と不可解な点を招いたようであった。私にしたる文学のバック・ボーンとも言うべき詩学的討論に立つて、現代川柳壇をも批判したつもりであるが、詩壇的には常識であり陳腐でさえある専門語が柳界のベテランにさえ六カしく理解し難きもののように考えられて私は憚然たるものがあつた。

凡そ時評とか批評とかいふものは、その道道によって専門的な言

辭を駆使しなければ、その理論の筋道が通らず、簡明直截な批判は成立しない。例えば私達が新聞紙上などに掲載されている映画時評を読んでも、最近の映画知識を持たずしては——活動写真といつていた時代の頭では——その時評が判らないといつたようなものだらう。私の詩川柳理論は現代川柳界にあつては確かに劃期的な理論展開であつたかも知れない。第一に従来柳界などで唱えている詩に対する概念規定を要革してしまつたからである。

現在科学の世界は原子核まで発展している、私達は町の薬局から購入するビタミン剤にしても、A、B、C、からxまでである。柳界に於ける詩に対する概念は、A、B、C、の三階程と言いたいが、第一階程のAから一步も出ていないものがある。私はあまり病氣をしないので薬石に親しまないが、家族の者が薬局から買ってくる風邪薬や胃腸薬にしても、その

新薬は六カしい化学方程式を示した効能書が入り、ラジオ、テレビのC、Mにも一応合点するのであるが、柳界では昨年提起した私の詩川柳理論という新薬の効能書に目を通そうとしないで鍼灸漢藥論を有難がつている頑迷なる川柳家の多いことであつた。

それは昨年、国文学—解釈と鑑賞—誌で川柳大鑑の七月特集号に「現代川柳批判」と題して、相当辛辣な、しかし徹奥い漢藥を盛つて現代柳壇を料理したものの如く、大村氏の鑑識によると柳界は

一、伝統派川柳、二、詩性川柳近派、三、詩性川柳、四、革新及進歩派川柳、と、大村の種別か十姉妹(小鳥)の色別けみたく、関東、関西の大家が、いとも簡単に種別、色別けされて、何等それに反論も出ず、国文学誌上に堂々取上げられたことに誇りさえ覚えてゐるさまが、私一人だけがも知れないが、滑稽千万で笑いが

止まらなかつた。  
私はつとに柳界の現代指導者の立場にある大家が口に川柳を文学とか詩とか唱えながら、文学や詩に対する不勉強というよりも無知無能なのに愛想がつきていたが、古川柳研究という、たかが国文学者如き昔の生えた石頭に噛みつかれてシユンとしてゐる不甲斐なきに義憤すら覚えもするが、こと己が柳誌の博徒でもない地割、縄張り争いとなると、親分、乾兒共ども目の色が変わつて遠く川柳本質論から離れて、喧嘩三昧に浮身をやつすのは、全くもつてどうかと思ふのである。

それはさて置き、読者に読まれた方もあると思うが、私達の「川柳雑誌」が大村氏によると、伝統派に分類され、「番傘」の伝統川柳界の覇者たる貫録に、「川柳雑誌」が之に続く(傍点筆者)という個所に至つて私は呆然としたのである。この呆然とした呆然ぶりに就ては、昨年京都から出ている「平安」誌の九月号と十一月号に少し書いたので、些か採録するようになるが、大村氏の流派分類には根本的には、現代川柳に底流しているロマンチズムを看取せず、徒らに柳誌の主宰者たる柳人の柳歴から判定し、われわれの考へてゐる現代詩観から外れた無詩学的白痴見解による詩派とか革新、進歩派などといった名付けをしてゐる

謹賀新春

高沢一浪

新潟県新発田市大字  
東宮内

佐野白  
水  
大阪市阿倍野区三明町  
二ノ十三

帝化川柳会

大阪市大正区船町一〇  
帝國化工K・K内

松下一様 深見 一平  
清水 利武 谷

川島業乙女 井野川甲子朗  
谷沢好祐 正口辰始

平松繁三 兼国 艶子  
佐野 白水

川 雜

大鐵支部  
天王寺支部

水尾 永断 堀 須賀太

浅野 颯太 正本 水客

野村 初甫 奥野 正一

辻 白溪子 塚脇 笑太

山口 白帆 保西 岳詩

西浦 一求 大江 秋月

植村客遊子 高木土佐太郎

吉原 紅月 宮口 笛生  
綿谷 洗石 松川 杜的  
阿万 万的 藤本ゆたか  
都倉 求女 大西 雨雀

非常識を語りたいのである。

私の現代川柳批判に就ては昨年  
發表した詩川柳理論の中でも、  
「柳論は花嫁」に述べた立場を堅  
持している限りは全面的に大村氏  
の分類は否定される可きであるが一  
応大村氏の線に沿うて検討してい  
くなら、冒頭の「現代川柳概観」  
に就ては、久良伎門の前田雀郎の  
「せんりう」吉田機司の「現代川  
柳」を伝統派関東の旗頭とし、富  
士野鞍馬、山路國古の名を挙げ劍  
花坊門の中島國天の「川柳人」友  
田中園子の「閻魔」広岡義明の  
「佐世保川柳」は詩性派であり、  
川上三太郎の「川柳研究」「川柳  
人」中の高木夢二郎を詩性近似派  
と称し、劍花坊の伝統的傾向を継  
ぐものに、旧「東北川柳」の大谷  
五花村、「きやり」の村田岡魚が  
挙げられて大村氏の個人的交渉の  
多い周囲の関東柳人は比較的精し  
く書かれてあるが、関西になると  
西田当百、花岡百樹、渡辺虹衣等  
による「関西川柳社」が明治四十  
二年に創立されたところがあるが、それ  
が何の理由で、何の主張をもって、  
何をしたかといつた久良伎、劍花  
坊のように誌して居らず、大正二  
年ボカリと若冠、当時二一才の岸  
本木府編集の「番傘」が発刊され  
現大阪の「川柳雑誌」の麻生路郎  
神戸「ふあうすと」の稻元紋太等  
も古くは之に参加したとある。そ  
してそれら挙げられた木府、紋太

路郎の柳歴系統は全然触れず、又  
その夫々もつた当時の柳誌の主張  
も陳べずして次の章の「伝統派川  
柳」に一括して簡単に伝統派と押  
込められている不公平とか不親切は咎  
められても可いだろう。しかも伝  
統派川柳を仔細に読むと、全国的  
に読者をもち海外までも一毎月  
百頁近い内容を持っているから伝  
統派川柳であり、消えては現れ、  
現われては消える微々たる柳誌は  
詩性派であり、或は詩性近似派、  
革新派とする皮相的な見解をとつ  
ているに於ては開いた口がふさが  
らないのである。或意味に於て川  
柳が庶民のものであり、衆愚の戯  
作遊戯として古川柳のもつ三要素  
は文芸本位の東京都よりは地方に  
より多く要求され、旺んである点  
は認めるが、だからといって直ち  
にそれが伝統川柳派であり、大村  
氏の言を借りると守旧の泥臭さを  
も伝統川柳の要素の一つにしてい  
るから、というのではない。

私は昨年十月頃、岸本木府氏と  
偶然に会い、道頓堀筋のあるレス  
トランで個人的にお茶を飲み飲談  
したが、自他共に伝統派の総帥を  
許しているだけあって、私などに  
も及びつかない彼は彼なりの川柳  
に対する批判を持っていることを  
知った。たまたま「番傘」十月号  
を手ずから寄贈され、帰宅後早速  
読んだが、木府自伝連載、十三の  
「わだち創刊」の題名で、青明、  
五葉、路郎、半文銭らとの文学青少  
年達との川柳によって結びついた  
交友録が愉しく、読む者をしてそ  
の友情の美しさに好感をもてたが  
既にこれら少壮の若い川柳家たち  
によって短詩の烽火を揚げ、明治  
四四年七月「わだち」創刊号が藤  
村青明を中心にして出された。即  
ち「番傘」創刊の一年半前であ  
る。と記されてある。

路郎師の場合、柳歴に就て私の  
資料によると、明治三七年読売紙  
上の川柳欄に、朴念仁選へ投句を  
なし、一方大阪日報の「浪花樽」  
で兎島六厘坊を知り、夏五葉を知  
り、大阪平野町五二館楼上で「葉  
柳」主催の川柳大会が盛大に挙行  
されたが、その立看板も路郎師が  
達筆をふるって奮闘したことな  
ど。久良伎が明治三七年に久良伎  
社を起し、劍花坊が三八年柳樽寺  
川柳会を起した年月と前後してい  
るし、明治末期から大正初期にか  
けて今で云われている詩性派的な  
短詩運動へ、青明等と共に「鞭」  
を起したが、廃刊後、路郎師は  
「雪」「土団子」「後の葉柳」  
等、故小出橋重画伯の挿絵、表紙  
など入れて当時の文壇に相当の反  
響を勃した。斯のように関西でも  
関東以上に根深く早くから現代川  
柳の文学開拓はなされていたの  
だ。

又大村氏は伝統派が、柳誌とし  
てこのマス・コミュニティとしての役割  
を果していることを認めている反  
面、その主宰者の句を「思想と素  
材が陳腐であるか、或は私小説的  
日常描写の羅列に終始し、おのれ  
一人だけが悦に入つて、他人の共  
感は願慮しないという私吟が牛棟  
も只ならず、多くの「当用日記」  
用の凡句が各誌の巻頭に飾られて  
いる。」「と非難し、尚地方の作家  
達の己が名前の活字になる喜びを  
満すために出来るだけ凡句を掲載  
して誌代徴収をなし、誌の経営を  
賄つていると毒舌の限りを吐いて  
いるその点同感するところもない  
ではないが、それはあながち伝統  
派川柳に限らず、大なり小なり凡  
ゆる流派を問わず二百数十冊の柳  
誌全体に亘つて云えることであら  
う。

以上述べた通り麻生路郎師は柳  
歴からいっても明治三十七年に川  
柳に手を染められた古い作家であ  
るが、柳界に対しては独自の作句  
態度をもち、  
その日暮しの家に基督さま  
が立ち  
その日暮しの軒に雀の巢が  
こぼるるよ  
天井の低さも知らず子は生  
れ  
天井にいつまでおさえられ  
て生き  
の川柳に於ける主情性を強調し  
酒とろりとろり大空のここ  
ろかも  
君見給え蒨葦草がのびてい

河相す、む 西宮市川東町七八 電話西宮③〇七念	山田 季 贊 山田 ス ミ 子 広島県安佐郡可部町 大手寺公営住宅四号	旭区今市町三ノ二〇九 今市商会	石井 伸 生	明和病院 川柳雑誌社支部 指導 西尾 琴 支部長 西尾青一路	橘高薫風子 徳水 鬼美 河相す、む 野呂 鵬江 樋口 舟遊 酒井 丹露 塚田 東雲 本城 弦月 吉本 菁風 中橋川太郎 奥村 善坊 木田 留三 網本 晴星 富水 夢路 門水 三舟 寺北 知司 水谷 策平 御園生すみ江 樋口 寿栄 三上 美路 村上 球絵 池田 文女	事務所 西宮市上鳴尾町一三〇 電話西宮④一七六七代 明和病院内	明和病院 川柳研究会 一 同
-------------------------------	--	--------------------	--------	---	--	---------------------------------------	----------------------

る  
 の名句をもって自らのロマンチシズムをはっきり樹立されて、微塵も古川柳的概念を残さぬ詩川柳の境地に入られたことは、短歌界の鉄幹、俳句界の虚子に匹敵しても劣らぬ柳界新興の只一人の先駆者であった。しかも路郎個人の作品傾向は現在尚つづき、昭和廿八年「旅人」句集を上梓するや、その文学的気品と高貴の香り全篇にみなぎり、野卑と低俗の代名詞の如く言われていた川柳（久良俊剣花坊の新川柳以後の川柳）に一抹の清涼剤を投じ、その頃たまたま来日したソ聯の詩人、イリヤ・エレンブルグをして、*「素晴らしいこれはニッポンの偽らざる詩だ」と感嘆せしめたことなど大村氏は御存知かしらんとするのだ。又師の多年主宰するわれわれの「川柳雑誌」は主宰者個人経営の柳誌として唯一の大雑誌であり、創刊の大正十三年は「一番傘」に約十年遅れると雖ども、創刊号より月刊を標榜し、この新春号を以て通巻第三八〇号を記録したことは、始めのころ一年に数冊しか出なかった「一番傘」よりは通巻に於てはまさっている。そして路郎師は一方現代川柳の全国的普及、川柳の社会化運動をこころざし、自らは川柳職業人に化して、片手間でなく川柳一ト筋道で身をたて家族を支えて三十余年、その途中日本人一億が建国以来始めての敗戦の経験を*

嘗めた多事多端のことなど路郎師の悪戦苦斗は筆舌に尽せぬものがあったであろう。しかし「川柳雑誌」は年々々々日を送って隆盛になり、戦後岡山県下に於ける県を挙げての川柳熱はフロ・フープの如く若男女を問わず輪に輪をかけて流行化したのは、山陽新聞社と名点者麻生路郎師の情熱のしからしむところであった。とは「川柳岡山」の主宰者大森風来子と言っている。

くもない。又川・雅購読者は他誌の購読者と違って、投句本位で購読するよりも、そういった作家以外の他誌の購読者も亦多いということだ。私は決して「一番傘」と対抗する意味でいうわけではないが「一番傘」の投句数より多いとは思わぬが、若し妙い月があるとすれば、路郎師の厳選で、没句者の光栄を担う者が多いということである。路郎師は絶えず、*「いのある句を削れ」と言いつづけ、弟子達はそれを作句の座右の銘としている。又最近では「一句をのこせ」と乱作をいましめ、生命がけの精魂をこめた句の出現を望んでいる。*

以上に述べた私の観察に誤りなければ、大村氏の現代川柳批判が百パー一からげの中に麻生路郎とその「川柳雑誌」を押し込めたことは妥当ではない。或は関西の他柳誌も大なり小なり自誌に対する主張はあり、誇りもあろう。徒らに泥臭川柳と貶され、私川柳の当用日記的凡作とガミられて、ビビる必要はさらさない。彼大村沙華氏は都に住み関東島風であったことはこれで判ったが、今一つ彼の批判の偏向の理由は、彼自身、革新進歩派川柳と唱えている石原青竜刀を支持する社会党左派の立場もあっていからであろう。私達は政治的に何ら社会党の右派でも左派でも恐れるのではない。（われわれの住む大阪第一区では全国只一人の共産党衆議員志賀義雄を選出した。）大村氏は「国文学」誌上では昭和廿八年、七月号の「川柳特集号」に於ても、「二、現代川柳の諸傾向とその批判」項の中で、*「現代川柳を分類して柳多留調詩性川柳とする観方がある。或は又詩性川柳対非詩性川柳の主張がある。思想的には進歩川柳と反動川柳の分類がある。」とよくよく分類難のある仁であるが、ここにも彼のいう詩性川柳の詩性という明確な概念規定がないため、川柳を分類するアマチュア学徒のベタンチックを一広認容するにしても、川柳の形式上の分類か、本質論の上での分類か、私には判りかねたし、尚そのあとで、*「詩性川柳や感傷川柳に対して「非詩性川柳」の名乗りを挙げたのは石原青竜刀氏である。」と書き青竜刀の主張とする内容に於ける諷刺、表現上に於ては穿ちをもって社会に貢献するような川柳といった意味の提灯持をしているが、それから五年後の国文学川柳大鑑での分類には青竜刀の非詩性川柳派は革新及進歩派に、革新進歩したことになり、相変わらず、提灯持をして、*「若しもこの派が、青竜刀の旧論「非詩性川柳」即ちドライ諷詠一辺倒のみに偏せず、抒情も詠嘆も」ということはブルミチーブな詩性をいうのではないか。亜鈍一諸論も包擁する。これは古川柳の伝統川柳の要素ではないか、亜鈍一多彩にして***

送 放 日 毎  
 二 一  
 愛 崎 岩

謹賀新春

西尾 栗

大阪市南区西賑町三番  
 電話五九六三番

謹賀新年

若本多久志

西宮市津門西口町五〇  
 電話四一四三番

川柳たましま社

白井三林坊

尚且革新の川柳に展開出来れば、時代の進歩と呼応して、将来伝統川柳の牙城に肉薄するのは、詩派に非ずしてこの派であるべく、健康性と鋭角の新風に照らし、その未来は曠目に値する。と最後に結んでいるが、文中筆者が注している箇所にも如く、青竜刀の場合、伝統派も詩性派もなく、チャンボンでよい、社会諷刺や時事吟でありさえすればよいとするべからぬ地方である。しかし当の本人である石原青竜刀の「わが社の主張」では「川柳の発生は俳諧の平句を源流とする。……略……われらは、この伝統をうけついで、これを近代文学の一ジャンルたらしむべく、人生社会に対する庶民の思想感情、特に批判精神を表現するところの諷刺短詩として形成することを志している。」と非詩川柳論者が、人間諷刺短詩とか、諷刺短詩とか、いつて詩の安売を敢てし、俳諧の平句を源流とし、附句が独立して川柳になった伝統をうけつぐとはっきり言っている。伝統の正統を踏む人民戦線派の川柳が、何故に革新であるか私は疑うものである。但し彼らのいう既成川柳界（既成川柳も亦）にあって思想の欠如は私のつとに指摘している点ではあったが、その一貫した思想性とか、批評精神（クリティック）が彼らのいう政治的立場乃至人民戦線の立場というワタに缺った人間の立場（観念的立場）か

ら提唱することが、革新、進歩派であると考えるのは早まっているし、それは私の思考する詩川柳的観点からも云えることであらう。何ら彼らの専売特許でもない。斯く考えれば、私なら大村氏とは反対に伝統派川柳のNO.1は石原青竜刀（別の意味では岸本木府）であり私の主張する詩川柳作家麻生路郎こそは彼大村氏の分類を借れば革新派の第一番目に挙げられても可いようだ。何故なら青竜刀の革新進歩は何等川柳それ自体の革新でも進歩でもなく、麻生路郎の思念する詩川柳理論は、伝統川柳とか本格川柳とかいった古川柳の概念を本質から変革してしまっているからである。（或は大村氏が勝手に石原氏を革新派といっているようであるが、石原氏には迷惑なことである。）

さればと言って麻生路郎の作品並びにそれを理論づけている詩川柳は大村流の詩性派や詩性近似派に入る可き性質のものではない。端的に言って大村沙華氏の現代川柳批判からは及びもつかない高度な次元にあり、それは現代詩学的文学論であったからである。換言すれば大村式詩性近似派である川柳家の考えている詩という概念（詩性派に入れられていう「天馬」を除外して）及び大村、石原両氏を含めて一般教養人の常識範囲内で云う詩は凡て無詩学時代の韻律形式上に規定されたものであ

るのに対し、私の概念規定をしてる詩は、散文詩の始祖、ポオドレルの「悪の華」にみるカオス性、アラン・ポットの「大鴉」などにみる知性的な美意識など、所謂現代詩詩観によって捉えた詩をいうのだ。昭和の始め現代詩人達は過去の詩と詩論とは完全に別別して、最早、アリストテレスの詩学も、中世古典のボワロウの詩論ではなく、パレリイ、ブラツドリの純粹詩論やT・Sエリオットの詩論、キエルクゴールからサルトルの実存文学論にまで入っている。邦国では生田春月の感傷詩論でも、タゴール心酔の野口米次郎の「詩の本質」論でもなくなつた。詩はセックスなり。と、いった堀口大学。詩とは言葉局に寺と書く故に言葉の宗教である。（三木露風）などのチャチな語呂合せでは詩は規定されなかつた。十年間思惟したといわれる萩原朔太郎のロマンチズム詩論「詩の原理」から現代詩論は約束され、詩的散文詩論―又はボエジョー詩論を書いた春山行夫の「詩の研究」西脇順三郎の「輪のある世界」北川冬彦の「詩人の行方」など芸術派の詩論展開に対し、一方でプロ詩人中野重治詩集やアチキ小野十三郎の「詩論」は壺井繁治、草野心平、岡本潤など昔の宣伝詩を放擲して文学芸術としての詩観をとるようになった。そして彼らは俳句や短歌や、川柳などをもって詩だとは誰も云わな

**味の七-コ**  
モダン 川柳

東へ 辻の北丸大橋心

**門 御**

TEL ☎ 6684

御集会には階上御利用下さい

川柳雑誌社  
にしなり支部

高槻市大字米室六九二の四	福田 丁路	櫻川 不水
新潟県佐渡郡畑野村目黒町	高野 むじな	
土井 文蝶	吾郷 玲人	本多 省三
魚住 満潮	石倉 旅風	岸川 漣
欄 清	木多 淡海	芝田 五色
中田 悟朗	井石 利幸	麻生 敏子
宮原 敏子	岡田 歌子	西川 梅志
後藤 梅志	大阪府西成区玉出新町	通一の一

(完)



# 繪島・生島 (中)

## 富士野鞍馬

この事件の時、繪島は三十

三才の脂のりきった性慾盛

りで、常に料理茶屋へも、吉

原へも行って豪遊して、幫間

などとも密通したといわれ、

増上寺の和尚に芝居行を誘っ

て、手厳しくはねつけられた

という話もある。

御代参和尚芝居へ誘はれる

(万明三)

と川柳になっている。

こうして繪島の関係した男

は数十人あるともいわれてい

る。これらの関係者が、繪島

でもある。

正徳四年(一七一四)三月

二十六日の朝、繪島は、

浮世にはまた帰らぬや

武蔵野の月の光の

かげもはづかし

と、月光院に対する御恩を詠

み、身柄受取の武士木戸十兵

衛に護送され、四月一日、高

速に着いて、城下から一里程

離れた、非持村火打平の囲屋

敷に押込められた。居間は八

畳一周、日に二度の食事は一

汁一菜であった。

享保四年の冬、城下の花畑

の囲屋敷へ移され、日蓮宗の

信者となり、信仰生活してい

たが、元文五年(一七四〇)

の秋から、身体にムクミがき

て、翌寛保元年(一七四一)

二月には一寸よかったが、四

月二日から発熱して十日の

夕、遂に終命した。六十一才

であった。

遺言によって、城下の蓮華

寺に葬られ、法名信敬院妙女

日如大師と刻まれた墓碑が

建てられた。なお近くの三義

村山室の遠照寺にも、遺髪と

齒とを分けて、蓮華寺と同様

な墓碑が建てられてある。そ

の後蓮華寺の墓は弔う者もな

かったが、大正の始め頃、心

ある人人の間に思い起され

て、昭和十六年の夏には繪島

を偲ぶ歌碑が、土地の有志者

によって寺内に建てられ、二

百年忌も営まれた。

江戸節の方では、二代目団

十郎が、助六を演ずるに当

り、繪島から、黒羽二重小袖杏

葉牡丹五所紋、及び下着と紫

ちりめんの鉢巻とを貰って、

それを着用して大当りであっ

た——と伝えられている。そ

れで、河東節の文句に「この

鉢巻は過ぎし頃、由縁りの筋

の紫も、君がゆるしの色見え

て……」と作られている。

見得が苗字へあたる新五郎

(タル四)

三宅島へ流された新五郎

は、その苗字イタシマが見得

に当った。二枚目の色男であ

ったので、

島中の女が新さん新さん

(傍 初)

ということにもなったのであ

る。

うかと詠まれている。

配所から新五郎は、団十郎

へ干魚を送り

初松魚からしもなくて涙かな

と一句を添えた。それを川柳

は、

一トからげ涙のとどく島干も

の (タル四二)

と詠んでいる。そこで団十郎

は、

そのからしきいて涙の松魚哉

と返句したのであった。

江戸と島芥子に泣いた初聲

(タル八四)

とそれが川柳になっている。

医者之交竹院も共に三宅島

へ流されていたが、島で死

に、長太夫と新五郎は、繪島

が終命した翌年、寛保二年

(一七四二)二月十三日に赦

免されて、二十九年目に、江

戸へ帰ることができたが、長

太夫は五十五才、新五郎は七

十二才であった。

これから逆算すると、事件

のあった正徳三年は、新五郎

四十三才の後厄で、繪島は三

十三の厄であった。そして繪

島は酉、新五郎は亥年生れと

いうことになる。

繪島は本名白井みよとい

い、はじめ尾張侯へ勤め、後

本丸の御使番となり、月光院

がお産の時附けられて勤続、

大年寄となったのである。

### 謹賀新春

## 3・3・3 川柳会

川雑出雲支部

尼

出雲市高松

川雑広島支部

平田越舟

川雑高知支部

大西迷窓

川竹松風

菊沢小松園

大阪市阿倍野区王子町  
三ノ三四  
電話 六六四四番

木口賀峰

吹田市松ヶ鼻一、二、三、七、八

# 川柳歳時記 (6)

水谷竹莊

## 冬の巻(二)

### 正月食行事物語

元日を飲み友達と出たしま  
い 路郎

お正月は一年中で一番飲む事の多い月である、そして正月の御馳走というものは依然として昔風であり、色々の食行事が復興されているのは面白い。

しかし正月の食行事は、地方により家庭により、しきたりや料理方も多少の相異はあるものである、また行事にともなう料理は、縁起や故事に重きをおき、うまさという点では二義的にあつかわれている場合もある。

正月は冬枯の季節で、特に新鮮な野菜が乏しい時である、昔からのおせち料理をみると根菜類や乾物などの保存食料を扱ったものが多く、三日日は水仕事をひかえるという習慣から、長持する料理法をとっているのが、よく火を通したものの、味をたっぷり含ませたもの砂糖や醤油を濃い目にか

らませたもの、酢を使ったものなどがえらばれている。

祝肴(いよいよかな)の縁起もそれらしく説明すれば、数の子は子孫繁栄、田作り(こまめ)は昔田の肥料としたことからの名で五穀豊稔を祈り、昆布巻は、ヨロコブである。田夫の黒豆は農夫が健康に働く意、黒くマメノしくありたいとの意味がふくまれている。

教の子で暮から女侍べらせ  
る 路郎

教の子はもうよい子供産ま  
いでも 不水

元旦に初めて汲む水を若水とい  
う、これは一年の邪気を除くとい  
われ、井戸のある家庭では、早朝  
に起きて手桶に汲む、共同井戸の  
あるところでは早起きを競って第  
一番の若水を汲む風習がある、こ  
の清浄な水が一年の生活に幸福を  
もたらすように祈念する、そして  
感謝の一日が始まるのである。

義理がたい人に元日起こさ  
れる 柴

で、中国の華佗という名医の処方  
であると伝えられている。葉屋で  
袋に入れたものを求め、袋のまま  
お鏡子に入れ、味醂を注いで浸し  
ておく、と芳香のある仙酒が得られ  
る、とそは効者から長者への順で  
飲み廻すことよって一家の邪気  
を払い長寿を保つといわれている  
屠蘇波んで雑煮の餅があま  
って来 一笑

七草粥は七日正月といって、七  
日の朝食には七草粥を炊いて祝う  
行事である、七草粥にはせり、な  
ずな、御形(ははこ草)はこべら  
(はこべ草) 仏の座(たびらこ)  
すずな(かぶら菜) すずしろ(大  
根菜)などの春の七草をみじんに  
刻んで、粥と一緒に炊き込み、餅  
を入れ、これに食塩をふりこんで  
食べる。

小唄などうたって妻のとな  
氣嫌 柴草  
前掛をちょっとはずした松  
の内 美舟  
次ぎ次ぎと約束がある松の  
内 竹莊  
お年玉酒の気嫌で二度も出  
し 丁路

正月も昔は紫雲たなびいた  
路郎

松の内も十一日になると、鏡開  
きという行事をする、鏡餅(お供  
え)を下げて小さく割り、雑煮や  
汁粉に入れる、これを蔵開きとも  
いうのである。  
寝正月さえも母には出来に

くし  
餅投げへ通りかかった運不  
運 伍健  
酒をほめ肴をほめて年始去  
に 葉乙女

正月十五日は戦後成人の日と定  
められたが十五日を祝う小豆粥の  
風習は、昔やぶ入りの子供達を久  
しぶりに迎える親の心をよく表わ  
した御馳走だと思ふ、小豆の粥に  
餅を入れ、砂糖をかけて食べると  
ころはさっぱりした、七草粥と対  
照的なものである。  
忙しく来て正月の呆気なし  
都詩子  
昼飯は他家で事すむ松の内  
輝国  
成人へ義務ばかりがのしか  
建朗

骨正月とは二十日正月のことを  
いう、新年の諸行事もこれで打ち  
とめとなり、台所の残りものなど  
を一切整理して御馳走を作り、台  
所で働いた人達の休養日とするの  
である。  
飲まいでもどんどん過ぎる  
久米雄  
松の内  
正月もせわしせわしと若々  
回天子

今年の正月はなべ底景気とい  
う例年より宴会がすくないとの事、  
こんな正月には  
二級酒でよけりや正月呑み  
路郎  
の匂がびったりくるのではないで  
しょうか。

### 雅号由来記

吉田圭井堂

今から三十年程前に、友人の横川君に、誘わ  
れて、香取川舟の舟会に出た際「漢堂」と  
自分につけたのがおもしろいので、それと  
違つて全国川柳大会が東京で開かれた時、そ  
の漢堂で出席したので、フット感する処が  
あつて舟会にも出す、作句もせず、いつしか川  
柳から縁去つてしまふ。室内は十年位  
の空白だと云いますが、私はもつと氷の様に  
思ひます。追記昭和二十年秋に遭ひ現在の香  
取川舟会を結成する目的が既に附つてあ  
るのを見て、急に興味を起し、舟会に火が  
つき、また一から川柳を作りたくなり、船返  
しました。勿論香取川舟会の舟会、故郷香  
取の漢堂をつかつたのですが、毎回前接指  
導をして下さる路郎先生や諸先輩の句と、私の  
それとは全く違つて居る、やうもつたりいか  
ぬように思つて居る、所謂、香取川がドコか  
の隅に残つて居たのでしよう。  
そこで思い切つて新振替すのだから号も  
変えよう、現在の香取川舟会に入ると、私  
中の井は入れない方がケイイので、入れたら  
イセイトも兼ねてくれる方ありますが、私  
はどうも漢堂も兼ねて同じになつて変わら  
ないで、井を入れては持たず、ケイイを引  
張つて、ケイイ堂と自称して居る次第です。

みんなの暮しが明るくなる  
セキスイのプラスチック



積水化学  
本社 大阪市北区岸堤町1



カブトは金竜閣での全員記念撮影

# 不朽洞会総会記

——路郎門下の俊鋭一堂に集う

戸田古方

いつもの光明寺も上町台地なら今日の会場金竜閣も上町台地。散りしく紅葉、黄葉の色もあざやかな晩秋の陽さし。この日、この時、この十一月十六日は何もかもに恵まれた不朽洞会総会の半日でありました。

開場一時、開会二時、司会は松江梅里さん。西尾榮理事長のことばにも、中島生々庵副主幹の挨拶にも口をつぐものはわが師麻生路郎先生のことばかり。榮さんは路郎先生とお父さんのところへ敷入りに帰ってきた兄弟姉妹のような不朽洞会員の皆さまと、生々庵さんは先生昨年の大患から、ここまで恢復されて、今日までのあたりお眼にかかれたよろこびを、一に名医の時機を得た処置二に豊乃奥さまの献身的な御看護、三に先生御自身の体力、精神力の偉大さと教え上げ、完全におなおりになっていないのだから、あまり御心配をおかけしたり、御負担になるようなことはつしまねばならない。一人、一人のポストを意識し、自覚して、努力してほしいと結ばれました。

里、無鬼、現理事長榮の諸氏、別室で協議の結果を詮考委員長より左の如く発表。

理事長 土井文蝶  
副理事長 西いわを  
川村好郎(留任)

常任理事 A 地区理事。B 地区理事。C 地区理事。

この発表を全会一致で承認、議事終了。新旧理事長の挨拶をすませ、直ちに新理事長文蝶議長席につき協議事項にうつります。ここで役員中に新しく参事を加えることが議せられます。香林さんや三司さんから活発な質問があり、説明の助太刀に路郎先生が立って下さいました。

先生も御病後のことではあるし、今度の改選は留任を一同希望したのでしたが、そうもならず新役員の不備を補う意味でおかれたいものです。この参事は前理事長、副理事長などを大体あててのようですが、中には遠方の方もあり、健康上直接活動願えない方もいろいろ助言をいただくために含まれております。その氏名は路郎先生のお話の終りに、先生より発表されました。

順を追って表彰状の贈呈です。受けられるのは武部香林さんと尼

緑之助さんです。香林さんは生々庵理事長時代、水く副理事長として会のために病みつけて下さいましたが、最近眼を病み、御不自由な毎日を送っていられます。贈られる先生も御病後、ことの外よく感動されたのか驚く程絶句され司会の梅里さんが代読されたほどでした。緑之助さんは畿川支部といわれた頃から出雲支部を通じて三十年以上も支部を運営してこられました。このお二人に表彰状が手渡されますと、受られたお二人の短いながら力のこもった謝辞がいよいよ先生の御訓話です。

「不朽洞会が発足したのは大正十一年十一月でした。木府氏の先生である西田当百氏の養子嗣故卿榮氏や、今日列席されている緑雨氏の肝入りで会が出来上りました。柳界に師弟だけの会が出来上ったのはうちがはじめてで、私の住居の名をとって不朽洞会と名づけられました。事情があつてそれまでの同人制をやめてこういうやり方に改められた時は借金してもこの仕事をつづけて行く決心をしました。雑話の経営なんか心配せず、よい句、生命ある句を創れとはげました。大家族主義ですね。弟子に孫弟子、ひまご弟子とふえて行きました。私は充分行届かず、世話も出来ず、洩もふいてやれないのに、博士にでも、何にでもなつて行きました。私はほんとに天下の幸せものです。(と涙ぐまれる)恋をするものも、借金でこまるものも出てきました。金の助けは出ませんでしたが、心の支えにはなつて来たつもりです。どうしてうすておけぬ。親馬鹿とでもいふのでしようか。観ませんか隠居なんか出来そうにありません。倒れても、またこうして出て来てくれるのです。どんな仕事をしてもうのために今度は参事を考えついたりしました。不朽洞会がしっかりやることは日本の柳界がしっかりやることなのです。

「世に川柳をするものも少くないが、なかには技をみがくことを忘れて、政治運動に没頭するものや我利をもつぱらにするものもありますが、あれはつまらない。不朽洞の川柳は川柳を身につけて幸福になるためこやっているものであります。尻で袴でもつけて碁を打っているとかにも強そうに見えるが、ほんとうに強くない。そんな柳人もいます。こっちは姿や形でない。もっと文学的に優秀な作家をつくりたい。幸いには同人やのうて弟子やから遠慮なくびし

こりと痛みに

## サロンパス

久光兄弟株式会社  
東京・佐賀・大阪

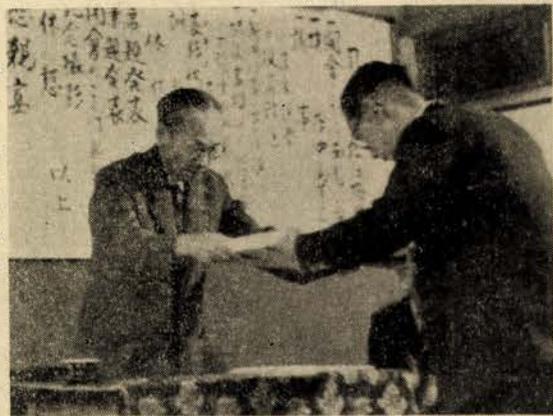


表彰状を受ける武部百林氏

びし選をする。やめたければやめろという調子だが、川柳塔の人々は誰もやめない。それどころか句を出さない不朽洞会員だつて大ぜいいる。白人君なんかもうさうだうちでは句が活字になるとかならぬとかは問題でない。野村胡堂も購読者なら、早稲田の教授もいる。ニューヨークやワシントンでもうちの雑誌は読まれている。以前北海道の釧路のある炭坑からすつと読んでくれている人がおつたが、きいてみたら、炭坑会社の重役さんやつた。これが不朽洞会なんだ。北国新聞から川柳雑誌の投句が割合に少ないようにいつて来たが、立派な作品でないとのせやしない。これが不朽洞のやり方だ。子供をぎょうさん集めて、今日はいいたいことをくり述べてしまふが、こんな時よりいわれんと思ふのでいうのです。皆さんのなやみなら何でも引受けます。長男、

次男、三男と立派な役員が揃い安心だかたのみです。「世話やっていますのやのうて話してゐるのです。不朽洞会のため柳界のため、私も世界的にやっています。今またれるのはソ連のエレンブルグの返事です。阪大松本医博氏がもうすぐ持つてかえつてくださる。エレンブルグのことすけが何とあるか。それがこられるのです。長男は私よりしっかりしている。次男も負けてはいません。だが私もいのちのある限りやります。昨年倒れて皆さんに御心配をかけました。まだ回復は七分通りです。しつかり静養はつづけます。参事をきめてもらったのもそのためです。参事は次の諸君にたのみます。菅天、春葉、香林、榊(渉外)、多久志(会計)、梅里(書記長)。スタッフの拡大です。御苦労ですがたのみます。今日はいれしあまの長話をしてしまひまして、御迷惑をかけたます。」

司会の梅里さんは「先生は大患をなさいましたが、それをこういつては何ですか、「左前長男だけが知っている」皆心に鞭うって、この長男になって、先生の御健康問題という左前を克服して行かねばなりません、それにもかかわらず極道息子ぞろい、それが気になります」とつけ加えられる。



同じく歴縁之助氏

先生のおことは天外や十吾が道頓堀の舞台ではつり、ほつりと泣き笑いさせている如く、毛利元就がその子供たちをさとしている時の如く、又太閤が仮名ぶみを親

しいものに書き送っている如くほんとはよき父をもつた子等のよろこびをしみじみ味わせていただきました。最後に席題、兼題の発表がありました。さすが、今日の日はいつもの例会とは引きはなされた水準を感じました。正にいのちある句へいどむかにみえました。

閉会の辞は新副理事長西いわをさん、時に予定の四時過ぎ金竜閣の玄関前で記念撮影、懇親宴はすき鍋をつつき合つて約二時間、八時頃散会しました。北から南から、今日の集いに馳せ参じた地方会員の方々による正調、お国自慢の民謡の数々を何よりの御馳走にして。

一九五八・一一・一六一

集う会員

競う秀吟

兼題「出張」

正本水客選

(以下・冒の天地人物と略)

出張の留守に左邊が運ばれる 岬月

出張と言わせて急場を切りぬける 月都

出張のババを困んだ日本地図 昌男

出張の妻が磨いたままの靴 兼題「趣味」 黒川紫香選

つまらない趣味だと思ふ古い壺 白柳子

毛糸はどいて夫の無趣味笑つとき 本客

聊かの趣味を養子の身はかくし 小松園

妻も趣味合して不遇を慰める 柴香

兼題「内風呂」 丸尾潮花選

湯の花をいれて子のない夫婦きり 水客

内風呂は眠ねたいのから先にいれ 方大

洗濯もすんで内風呂落す音 好郎

内風呂の湯気爪弾きの妓を待たせ 席題「秋」 尼縁之助選  
一ト言は秋へふれたく断り状 白柳子  
逢うて去ぬウールへ秋の霧が這い 潮花  
医者業お灸と秋を迷いつめ 井平

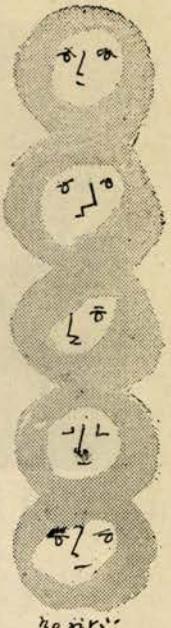
叱かられた思い出ばかりなつかし 小松園  
思い出にはかり生きてる元スター 阿茶  
思い出の道は避けたし通りたし 好郎

出席者 (順不同)  
廣生勝郎・和田登志子・西いわを・菊沢小松園  
西出一策・尼縁之助・阿部柳太・伊藤泰弘  
林野雄光・小西福丸・田垣方大・大谷月都・真  
藤一朗・高野啓純・川村幹郎・石倉敏夫・青木  
多久志・長谷川三司・山田尚志・河田吉乃・土  
井文彦・福田三川・山田尚志・酒田清子・川  
川龍雄・田中狂二・島島良昌志・下山清彌  
黒川紫香・橋高葉子・高橋操子・伊藤操子  
・木村千鶴・北川善里・須崎豆枝・杉原隆子  
・丸尾潮花・辻本木・松村桂樹・林昌男・小浜牧  
人・河村瑞川・武部香林・武部若菜・西原葉  
友・賀山山・柳葉崎花・橋高静馬・中島小石・中  
島生々庵・橋本縁子・正木不客・平井井平・平  
平敦美・吉田圭井堂・神谷凡九郎・後藤梅  
志・西尾青一・野村胡堂・岩崎愛二・廣生歌

福壽司

心斎橋筋大丸前  
電話の三三四番

入門講座



コッソんとくるところ

研究題「きもの」

戸田古方

秀句を抜くのが目的でないこの講座、問題点のある句を拾い出して考えてみたいと思います。その前に「きもの」ということばをどう解釈するか。「きもの」は着る物なんです、やはり一般に和服を意味するものとみえて、あまりかわった「きもの」はなく、その属性といえますとやわらかい、静かな感じがたまたま、その間に地味とか派手とかがアクセサリーの如くチラチラいたします。

テニオハ即ち助詞をふくめて、一字、二字の扱い方に問題のある句。

- ① 双葉より女はきもの事を云い どんたく
- ② 正月の晴着の娘はもう大人 鼻下長
- ③ 夫への言葉を期待したきもの 保夫
- ④ 里に来て母のきものでよく眠り 知恵美
- ⑤ 木綿でも仕立おろしの胸を張る 歌子

⑥ 遺み分けきものへ又ひとしきり 岳詩

①と②の「は」は語調からいふとない方がよいのですが、内容から見ますと柔か味をつけています。③天と妻の二人つきりとすれば、「への」は「の」とする方が意味の通りがよくりますが、それでは舌足らず、いっそ「夫から」とでもしたら加何。④このままでよいのですが、句主は「に」のところ「へ」とかいて消しておられます。そこで「に」か「へ」かということが問題となるわけです。「へ」は方向に重きをおきます、「に」はその場所におちつけますので、この句主の訂正は適切であったと思います。⑤の「の」を愛えるとなると「は」ぐらいたくものでしょうが、これも「たとえ木綿でも仕立おろしの場合」あるいは「仕立おろしの場合」か「仕立おろしきもの」と「きもの」を押し出す方が「仕立おろし」ということを重くみるより状

景もはつきりしてくるし、動きも出てきます。⑥の「又」の前後が何か歯抜けの感じがしやしませんか。「又」の代りに「きものになつて」とすると「順番がきて」だけになってしまいますので歯抜けのまま「又」で我慢せねばならぬのでしよう。

次に気になるいい方をした句を⑦子は二十亡夫のきもの着れる年 参無子

⑧ たまに着る着物にしつけ残つとり 十七

⑦「着れる」は「着られる」でしょうが、そういう言葉のつかい方をする句中の人物を活写しているわけで「もう着られ」とか「着はじめ」とくらべるとアクの強さが長とも短ともなっているのです。そのことは⑧の「残つとり」にもいえることで、これも「残つて」と比べてごらん下さい。この二句ほどではなくとも読み下してコッソんとつまずく句、ます下五にその着るものもの。⑨きもの着て今日は休みと云う格構 自然

⑩五六才もうおしやれ気を着物見せ 豊年

⑪並ぶ肩舞妓の着物目を奪い 隆文

⑫きりもんがほやいてる小さい乳房 静観堂

⑬めくら縞きもの長老席高 悟郎

⑭似合わないきものが妙に好きであり 敏子

⑮妻はやつぱり和服姿が的すなり 登

⑯格構は格好とかくのが普通、この「格好」は「姿」とするとやわらかくなります。「すがた」とすれば一層あたりがほんやりきます。「きもの」が余程特殊なものでないかぎり堅さはどうですか。

⑰「着物に見せ」でしようね。だが字音が伸びすぎますので迷うところですが。組みかえてみましょうか。「もうおしやれ着物にみせる五、六才」。⑱並ぶ肩と伸々うまい出だが、下五へいって尻すほみになってしまいました。「目を奪う」というような抽象的、概念的な表現より、具体的なもの、それとも同じ抽象なら文字からでも「絢爛」「豪華」というものの方がよくはないでしょうか。それに付けても柳秀さんの名句「きんぎよやに難妓袂を教えられ」の豪華さに追いつきたいものです。⑲「程ようにおち小さききもの着る」という句がこの句といっしょに出ています、この句は小さい乳房を反対にかこっているようです。和服の時はおちちは小さいのがいいの、大きいのがいいの、小さいのがいいのではないかと思ふのですが、そうするとこの句はわざわざ「きもの」といわず、方

西独クノール社より新輸入

# 神経痛・リウマチに...

オサドリン錠

オサドリン錠は西独クノール社が多年研究の結果、新発見した神経痛・リウマチ治療剤です。その作用は確実に胃腸障害などの心配がありません。(10錠) 350円・(20錠) 650円

しかも字余りを犯してまで句体をなされたので「ほやき」の程度がよく出てくるようです。⑩席たかくは上座ということでしょう。この句のボツン、ボツンと途切れたあつかい方にこの下五もよく合っているようです。⑪の句主はこの句のわきに「似あわなない妙なきものが特に好き」とかいて来ていられますが、どちらも特長がありませんが、私には「特に好き」がコツンと来るのです。「妙に好きであり」も重すぎはしないかと思えます。「妙に気に入って」ぐらいでは。⑫「的すなり」は「適すなり」とかと思えます。ところで問題は「適すなり」です。普通なら「よううつり」とか「よく似合い」とかするとこです。しかし、句主の風格とか個性とかとなると無下に「適すなり」を捨てるわけにゆかないのです。

コツンの程度の可成高いもの

⑨深水の画に似て着物姿の美しく  
初甫

⑩派手さきの飾から頭疑われ  
句念坊

⑪「姿」ですがね、どうしても着物といわれないといけないのかしら、又「着物」だけではいけないかしら、そもそも深水の画というのが大い「きもの」なのですから、そこを意識して畳みかけていられるとも思えますが、折角のすらすらとしたものをねらっているだけに気になります。⑫も「派手さきもの」の「きもの」なんです。

金 泥 集

麻 生 菫 乃 選

課題「夫婦」

ふくれてはいらぬ用事妻に出来 若 菜 夫婦して築いた富で妾置き 風の子 フレンドのように名前を呼んで妻 一 栄  
あまんじやく云い合つて夫婦は頼り 同 奥さんのリードで家が栄えとり 同 荒波へ夫婦二人の舟を漕ぎ 奈良子  
紙難でさえもめおとのぬくい影 きさ子 振り出しへ戻る夫を信じてい 知恵美 好きなことしときなはれと妻は言い よし子  
たこ焼を売るお二人にあった過去 同 学生夫婦家計の方は親がとり 花鶴美 手をつなぎ石段登る老夫婦 俊 江  
子が出来て婦唱夫随になつてゆき 阿 茶 夫婦やろかと横目ではかられる 良 子 休日を夫婦で白髪抜き合うて 富士子  
いやいやの夫婦ぐもしへ子が五人 同 ちくはぐで戻る夫婦の裏住居 徳 子 孝行をテレビにさせて若夫婦 文 女  
夫婦して税吏へ口をあわせとき 陽 子 かんたんな符号がわかるい夫婦 美 舟 夫婦にはなれずたがい強く生き たつよ  
子供さえなければ別れたい夫婦 同 金に縁遠く夫婦は趣味に生き 春 栄 老夫婦額にきざむ人間味 知 恵

この「きもの」をとって、もう少しことばを補わないと「輪」といい「頭」といい、大分もり沢山ですから、整理しないと。「派手さきもの」に頭疑われ、「派手なもの」がお輪さらけ出し、「これらが良い句ではないので、ただ整理の見本を作ってみたのです。最後に一句、現代版能因法師と評とつたものを、

⑬春買った着物を秋は売り飛ばし  
周 甫

御承知の如く「都をば霞とともに出でしかど秋風ぞ吹く、白河の関」の一首をさも旅行の実感吟にしようと、半年間姿をくらし、毎日陽に顔をさらして人工陽焼けに骨折った話。この句があまりに春、秋と形がととのっているの

対照を思いついて、それから生れた句という感じがするのです。どうも悪口がすぎたようで、うしろめいた心もいたします。多謝、句評とは因果なことです。

★  
今はこの文字を  
不二田一三夫

新春ともなれば、勅題という文字を、句に文によく使われるが、一会社の令嬢が皇太子妃にもなられる今日、もう勅(みこと)のりなんてことはなくなっている。したがって勅題(ちよくだい)は「御題」と書かねばならない。

高 峰 柳 児	長野県須坂局内太子町
川 岡 山 支 部	林 葵 丘
謹 賀	江 国 幽 谷
新 春	宗 高 矢 寸 志
	津 田 麦 太 楼

日本へ帰ることを「帰朝」また来ることを「来朝」といって、だが、これも「帰日」または「来日」と書くことは、誰でも知っているがよく忘れることである。「淋」この文字もやがて消えてゆくので「さびしい」とかな文字にするか、「寂」を使うようにしたい。「酒を呑み」これだけはせひ昨年書いたが「飲」を使っていたかと思う。

雑 川 婦 人 友 の 会 新 春 総 会

日時 一月二十五日(日) 十一時  
会場 割烹 大 万  
(阿倍野区松崎町三丁目一〇)

- 司会及開会 酒田 清子
- 挨拶 理事長 中島 小石
- 企画と新理事発表 丸尾 潮花
- 挨拶 顧問 中島生々庵
- 兼題「箸紙」 麻生菫乃先生選
- 兼題「人形」 中島 小石選
- 兼題「五時」 高橋 操子選
- 柳話「友の会の句に就いて」  
会長 麻生 菫乃先生
- 当日席題二題 選者当日発表
- ☆ 三十四年度定金は理事長及理事の改選期にりますので多数会員の出席をお待ちします
- ☆ 記念撮影及スナップ撮影  
☆ 余興 会員有志
- ☆ 会費 三百円(宴会を含む)
- 幹事 花代子 春榮 葉乙女 奈良子 白美  
美喜
- 役員 杉原 吟女  
は一月二十日迄に潮花館御座下さい



# 勝気

武部香林選

監督に勝気などが気に入られ 一傘  
 嫌われる役を勝気へ持ってゆき 宗太郎  
 専門でない勝気は突っぱねる 雄声  
 嘘ついてまでも勝気が見栄を駈り 鶴江  
 勝気な娘親はドライに割り切って 豊年  
 年若い勝気な妻に引きずられ 保夫  
 商才と別に勝気で押しとおし 白帆  
 長男へ妹の勝気あつて欲し 暁明  
 生来の勝気がさせた委員長 恒雄  
 勝気な娘一人で生きる職を持ち 岳詩  
 今に見ろ今にと勝気で輪をとり 葉光  
 金銭は他人と妻の気の強く 圭井堂  
 気の弱い僕に勝気な妻でよし 愛鳩  
 それ以来勝気な妻が借りに行き 三林坊  
 満員電車勝気乳房を意識せず 与呂志  
 結局は勝気な妻に引きずられ 漫歩  
 娘の勝気負けまいとして涙ぐみ 真奇  
 行商に後家の勝気を押し通し 鳴恍  
 參觀日勝気な母を無口にし 周甫

# 路

# 集

勝気さを買われ商家へ嫁にゆき 忠太郎  
 老いて子に従って勝気の佞び住居 美美子  
 開病は妻の勝気に支えられ 由岐子  
 母さんの勝気に似たと子はすまし 同  
 出るとこへ出ると双方とも勝気 不二  
 街録で勝気な妻の袖を引き 十九平  
 平社員勝気な給仕にへこまされ 爾  
 借金をしても隣りに負けていず 雄々  
 姑に負けぬ勝気な嫁がくる 同  
 妹の勝気を先に嫁がせて 葉光  
 税務署へ勝気な妻はどなり込み 栢月  
 勝気さを心の魔手がよろめかし 旭峯  
 これまでは勝気でもった母も老い 敬二  
 どん底に追い詰められて妻泣かず 寿栄  
 お隣のテレビが勝気気に入らず 牧人  
 勝気まだこれが恥なまとは知らず 幽谷  
 御勝手になさいと勝気術をまこめ 久呂平  
 おトイレで泣いても勝気負けていず 栢月  
 低級児出来て勝気がやや鈍ぶり 夜潮  
 日雇にまじって女子を育て 一鶴  
 部屋へさがってから勝気涙ぐみ 八九寸  
 虚勢はる勝気と男児ぬかれて さぎす

再起々々妻の勝気にはげまされ 狂二  
 一人子が親の勝気について来ず 藤波  
 ままごとへ母の勝気がそのまんま 箔川  
 勝気な娘だったがやがりつまずいた 保美  
 七五三勝気へ無理な借りが出来 美音子  
 バトロンと別れいよいよ勝気なり 初甫  
 勝気の娘会社のうつつぶんぶつちやれる どんたく  
 親戚も嫁の勝気に遠ざかり 圭井堂  
 このれん勝気な妻に支えられ 庸佑  
 今日地位勝気の母へ手を合わせ 陽子  
 沽券にもかかわりますと妻勝気 代仕男  
 唇を逃げて勝気がふと淋し 昌男

佳吟  
 善人を勝気な妻がはがゆがり 愛鳩  
 折れて来ぬ勝気へ親は不安がり 笑太  
 縁遠くなつていよいよ勝気なり 陽子  
 勝気でも女は女よよと泣き 同  
 よう出来たもや奥さん勝気なり 宗太郎  
 モデルでもします大学続けます 恵二朗  
 勝気さも毎日の客の帰るまで どんたく

人  
 勝気だから放つとけばいいいさ 芳仙  
 涙一つこぼさぬ勝気うたがわれ 笑太  
 天  
 おろおろと母がなだめる勝気の子 どんたく

軸  
 唯我独尊草っ柱をこすりあげ 香林

# 歌手

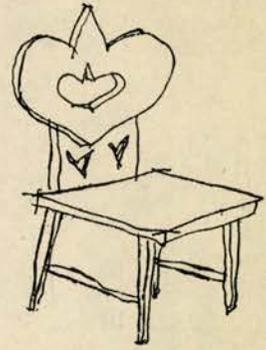
弘津柳慶選

# 春新賀謹

川柳雑誌社	大聖寺支部	川柳部一同	南海電氣鉄道株式会社	川雑倉敷支部
加賀市大聖寺水町四八	野村味平方			
川雜米子支部	松露川柳会			
米子市富士見町一三五小四方				
川雜木次支部	藤井明朗			
島根県木次町				
木村千容				
田垣方大				
木谷谷木				
松村万古				
野田素身郎				
梶原一善				



# 柳界展望



## 句会

▼本社新春川柳句集「三人」刊行祝賀句会は一月十五日(祭)午後一時から下寺町二丁目の光明寺で開催される。多数出席を賜りたい。

▼南区医師会文化部杏林川柳会(大阪市)の忘年句会は十二月十七日午後七時半から南区新戎橋北詰料亭「おます」で開催された。

▼大阪通信病院忘年川柳会は十二月二十二日午後四時半から五階会議室で開催。▼コクヨ川柳会(大阪市)句会は十二月十九日午後五時半から黒田国光堂で開催。▼南海電鉄川柳句会(大阪市)は十二月二十五日午後六時から親和クラブで開催。以上路郎主幹出席。

▼豊中川柳会結成記念市民川柳大会は十一月三十日(日)午後一時から豊中市立中央公民館で開催された。

▼川雑倉敷支部句会は十二月十四日に一善居で開催。▼明和川柳研究会(西宮市)で十二月十四日に忘年句会を開催した。

▼ゆめ忘年句会(岡山市)は十二月十三日に幽谷居で

開催。▼東京観光川柳研究会の一月句会は十一日午後五時から港区芝新橋六ノ六六 伊藤瑤天居で開催。▼「ながさき」の一月第一例会は十日午後六時から、第二例会は二十四日十八銀行新大工町支店階上で開催。▼「こまつ」新年句会(小松市)は一月十一日(日)午後一時から土居原町昭和通り芦城温泉二階で開催。兼題「赤い顔」「日記」「迷い」「売出し」。

▼平安川柳社新年句会(京都市)は一日夕五時から南昌院パレス映画横で開催。兼題「曇・火・火のれん・しあわせ」。

▼長野県川柳大会は四月十九日(日)十時から須坂市公会堂臥竜公園で開催。兼題生活(紫痴郎選)花火(呑風選)坂(民郎選)試験(柳見選)各題二句、投句須坂市太子町 高峯柳見宛。▼ひろしま一〇〇〇号記念第九回新年交歓36題川柳大会は一月十一日(日)午前十時から広島市西新町光道会館で開催。

▼熊本県作家新春川柳大会は川柳噴煙社主催の下に一月十八日(日)正午から熊本市桜町通熊本建設業会館

二階ホールで開催。兼題婚約・クラブ・夢・売店・A級各題三句以内。

▼川雑下関支部(下関市)忘年句会は十二月六日下関鉄道職員会館で開催。一年を通じての皆勤者は中村九呂平氏一人であった由。

▼川雑高知支部(高知市)川柳大会は十二月七日旅館「平民」で開催。

▼広島市短詩型文芸大会川柳の部大会は十一月十六日広島市文徳殿で開催された。

▼岡山電報局十一月句会は江国幽谷居で開催。

▼川雑岡山支部(岡山市)忘年川柳大会は十二月十四日土居雷山居で新築記念を兼ねて開催された。

▼竹原川柳会(竹原市)忘年句会は十二月八日午後六時半から竹原商工会議所で開催。

(土)午後一時から警察クラブで安西冬衛(詩)安田青風(短歌)牧野美津穂(俳句)の各氏と共に大阪府警察本部の雑誌「なにわ」の新年号のための「新春放談」と題する座談会に出席された。

▼堀口塊人(西宮市)武田北州(豊中市)の両氏は来阪中の石曾根民郎氏(松本市)と寄せて書きで路郎主幹の健康回復を祝福された。

▼水谷竹莊氏(大阪市)は十一月二十一日白浜・湯崎・那智・新宮・湊峽・湯の峯と南紀の旅を続けられ「千疊敷二人の名前影ってくる」の句信を寄せられた。

▼佐野ト占氏(八代市)は観光事業のため九月から十一月の末まで旅から旅へと出て殆んど家に居られなかった由。

▼菱田満秋氏(西宮市)の肝煎りでこの十月に発足した谷向病院川柳会はその後会員数三十名を越え添削指導に忙殺され嬉しい悲鳴をあげていられる由。

▼久家代仕男氏(平田市)は島根県第一の米地帯斐川村出東を担当、毎日米の検査で多忙を極め一日に千俵から千二百俵の検査でくたくたになっ

ていられる由。

▼藤井雅佐女さん(兵庫県)は療養中のところ「肩かりて試歩する庭の肌寒さ」の句信を寄せられた。

柳書

▼川柳句集「三人」(水客・紫香・潮花)が十二月初旬に川柳句集「三人」刊行会(大阪市住吉局区内万代西五ノ二五)から刊行されたが、発売と同時に売切れた。

▼川柳鑑賞「そのまま」(平山恭子著)が東京都渋谷区代々木富ヶ谷町一三九ニアパート棟の木荘内から刊行(非売品)。

▼「続々有題無題」が(吉川亜人著)山口県久賀町四四六三、浪の音川柳社から刊行された(非売品)。

## 酒 清



灘・魚崎  
大塚合名会社醸

## 消息

▼麻生路郎主幹は十一月二十九日

スリットで  
着心地のよい

**O.S.K.**  
**レディモード**

株式会社 大坂商店  
大阪府東区平野町一丁目二番地  
電話 94-1745・5563 番

長柄齊場で盛大な告別式が執行された。同氏は俳誌「大樹」の主宰者として又犯罪者の保導に尽粋せられていたことなどで有名であった。関西短詩文学連盟監事。謹んで御冥福を祈る。

▼木村十悟氏(大阪市)母堂なお殿は十一月二十四日死去二十六日郷里大和当麻で葬儀が執行された。年八十三。哀悼申し上げる。

▼正岡容氏(東京都)は首のしゅようのため慶応病院に入院中七日午後七時二十五分死去。年五十三。哀悼申し上げる。

改号  
▼有働芳仙氏(熊本県)は同一雅号の柳人ときざらわしいので新春より萊春と改号される。

轉居  
▼清水白柳子氏(大阪市)は大阪市天王寺区上之宮町十六番地の二へ転居された。▼赤塚菜天氏は岸和田市額原三八二へ移居。

電話開通  
▼本多省三氏(大阪市)宅に電話が開通した。城東局㊤二九四六番。

正誤  
▼十二月号41頁二段2行目、41頁三段9行目、雄声とあるは共に雄峯の誤りに付訂正。(薫)

不朽洞  
★不朽洞会総会  
別稿の如く  
十一月十六日

会から  
(日)午後一時  
から上之宮町の金童園で、不朽洞

会の総会を開催。路郎先生御夫妻及会員六七名、規約の改正及び役員推薦が左の如く行われた。会則の改正では十一名の役員項目に新に参事若干名を置くこととした。役員は次の通り決定された。

- |     |   |       |
|-----|---|-------|
| 理事  | 長 | 土井文蝶  |
| 副理事 | 長 | 川村好郎  |
| 副理事 | 長 | 西 いわを |
| 参事  |   | 戸倉普天  |
|     |   | 中島生々庵 |
|     |   | 北川春巢  |
|     |   | 武部香林  |
|     |   | 西尾 榮  |
|     |   | 若本多久志 |
|     |   | 松江梅里  |
|     |   | 松江梅里  |
|     |   | 戸田古方  |
|     |   | 市場没食子 |
|     |   | 正本木客  |
|     |   | 黒川紫香  |
|     |   | 丸尾潮花  |
|     |   | 小川恒明  |
|     |   | 中島小石  |
|     |   | 清水白柳子 |
|     |   | 菊沢小松園 |



写真説明 前列向って右から土井文蝶氏(理事長)中島生々庵氏(参事)藤生路郎氏(参事)松江梅里氏(参事)後列右から若本多久志氏(参事)西尾榮氏(参事)西いわを氏(副理事長)川村好郎氏(副理事長)

- |       |
|-------|
| 八木摩太郎 |
| 徳永雅美  |
| 富岡淡舟  |
| 佐野白木  |
| 木村十悟  |
| 伊達堰子  |
| 太田良子  |
| 山川阿茶  |

- B地区理事
- |       |
|-------|
| 新川博也  |
| 後藤梅志  |
| 水谷竹莊  |
| 菊田いさむ |
| 木村木堂  |
| 小西無鬼  |
| 田中烏雀  |
| 須崎豆秋  |
| 吉田圭井堂 |
| 辻 圭水  |
| 高橋操子  |
| 金井文秋  |
| 西尾青一路 |
| 尼 緑之助 |
| 宮田不二  |
| 大西八歩  |
| 浜田久米雄 |
| 国弘半休  |
| 佐野ト占  |
| 三嶋美笑  |
| 石川侃流洞 |
| 大西迷窓  |
| 野村味平  |
| 梶原一善  |
| 直原七面山 |
| 河村日満  |
| 田垣方大  |

- C地区理事 築山快夢起
- ★常任理事会——改選後初の常任理事会は11月28日(金)午後七時から南区三休橋南詰西入ル中島小児科診療院階上で開催。
- 一、新人の指導に関する件  
一、柳人園の意志の疏通を図る件  
一、川柳まつりに関する件  
一、その他の改革案
- 以上のことを協議十時散会。
- 出席者は路郎・生々庵・小石・文蝶・榮・古方・木客・潮花・紫香・多久志の諸氏といわを。(いわを)
- |       |
|-------|
| 林野魅光  |
| 永松東岸  |
| 津田友太楼 |
| 伊藤茶仏  |

和洋菓子

朝 日 堂

大阪南区市電戎橋御堂筋角  
TEL (75) 7284

いのちある句を創れ

# 各地の増

▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

## 本社 忘年句会 (大阪市)

12月7日 午後1時

会場 光明寺

季節のリズムージングルベルのはんらんだ。ペーブメントの靴音もあわたたしい。そんな中でことしも俗界をはなれての忘年川柳大会を迎えられたことはよろこばしい。

路郎、葎乃両先生もお元気に出席され満堂大会一色になる。

春集編集局長の柳話から33年度のさよなら句会が開かれる。まず雅号の由来から医師は薬名等を好んで雅号にしていること、俳人に植物の名が多く、柳人に物の名が多いことから、外来語の往來のはげしさを、氏独自のソツとムダのない話で魅了された。

最大の興味を呼んだ不朽酒杯争奪に、よく同点決勝なるかと思わせたが春集氏が本月の覇者となられたので、新星響風氏の永久保持ときました。雪月花戦は雪の進軍目ざましく白りボンが勝ち、支部対抗は杏林の阿茶氏優勝。閉会後は同所で忘年宴会がにぎやかに催され、来る年への決意を新たにす。

出席者 路郎・句念坊・省三・鶴汀・風薫子・柳宏子・一三夫・文蝶・豆秋・圭井堂・保美・留三・東雲・伸生・栞

淡舟・潮花・花代子・漣・半歩・十悟・いさむ・恒明・鳩花・多久志・満潮・阿茶・水客・晃・す・む・麦稻子・義弘・梅里・賀峰・六童子・永断・春集・三司・花村・木堂・悟朗・高史・小松園・太路・庸佑・利武・竹荘・紫杏・舟遊・吟女・昌男・静馬・颯子・梅志・雄声・兼治郎・与呂志・井平・牧人・満秋・一傘・狂二・生々庵・葉光・いわを・一瓢・菁風・旅風・古方・雄峰・進之助・文秋・月都・博也・没食子・繁雄・悦子・葉乙女・淡海・良子・宏子・葎乃

### 兼題「寒空」 麻生路郎選

寒空へ白衣の歌がまだ止まらず 岳詩  
寒空へネオンが燃えるクリスマス 芙路  
寒空へ広告塔は舞いつづつ 雅佐女  
寒空へ顔見世の列デモの列 一三天  
寒空に 剛 軽者の奴風 旅風  
寒空を来てかす汗に迎えられ 牧人  
忘れものして寒空をまい戻り 梅志  
落ちる物落ちるよいうよいう寒い空 澄子  
死ぬことを止め寒空をまたもどり 賀峯  
寒空に金閣寺までちと鈍り いさむ  
寒空へつめたたく旅客機のライト 雄声  
寒空を犬の散歩にひきずられ 一十  
寒空へ人待ち顔の靴みがき 奈良子  
寒空の下焼跡が広く見え 葉光  
寒空にパイトは校歌たからかに 良子  
寒空へ押しだされた臨時工 澄子  
寒空にまだ野次馬は散りもせず 澄子  
地下足袋で出る寒空が雪になり いさむ  
寒空へ坊やに背負いぐせをつつけ 陽子  
寒空を焦す火の手が派手に見え 失名  
焼跡の人に 寒空長く延び 潮花  
酒ときいたら寒空もなんのその 花村  
寒空へ白ナンバーの埃り浴び 失名  
寒空へどの煙突も煙吐き 木堂  
寒空に待ってる程の恋でなし 轟風子  
吟女

### 兼題「鼠」 須崎豆秋選

寒空に足が家路へ向いてゆき 多久志  
寒空に立つ慈善鍋底が見え 与呂志  
寒空に線路を渡る灯が赤い 淡舟  
寒空へ今どん底を意識する 保美  
寒空が貧乏世帯へのしかかり 麦稻子  
寒空へ拾い屋身代限り着る 失名  
寒空へヘルンベンすくめるだけすくみ 幽谷  
寒空を一人で烏勘三郎 豆秋  
ふまながら何が目出度い初日の出 三司  
寒空へ田舎廻りのピラ切れかけ 淡舟  
寒風呂を焚いて寒空怒鳴られる 圭井堂  
寒空へ御苦勞さんな家主なり 栞  
鼠の糸の一直線も寒空や 仲生  
寒空へポスト直立したまんま 一瓢  
寒空へ一家支える車おし 庸佑  
寒空へお礼参りの顔になり 木客  
寒空に片脚浮いている工夫 八九寸  
寒空が続き旧正らしくなり 菁風  
逢いに行く紅です何の寒空ぞ 一瓢  
寒空をジグザグ愉快そうに行く 一三天  
寒空に親にはなれたような雲 淡海  
寒空に自分の息を見て歩き 春集  
有りつけ此の寒空にドアーマン 暎子  
寒空へ葬儀屋の声 透き通り 春集

**ヒゲソリ後に**  
アストリンゼンは世界的常識!

- 1 生々した男性美をつくる
- 2 爽快でヒゲソリがたのしい
- 3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力!

**明色アストリンゼン**  
桃谷順天館

鼠の多いことも家主にいいそえる  
口説こうとしたら鼠が騒ぎ出し  
借金のお餅を鼠が引いて去に  
安全な場所から鼠首を出し  
貧しさは鼠に足を食いつかれ  
猫の鈴鼠は非常ベルと知り  
妬いたのが鼠天井であはれ出し  
お供えがもう上ると待つ鼠  
横着な鼠やあと寝つかれず  
猫の声して鼠の恋がさめ  
子鼠が説教の横走り抜け 球絵  
犬猿の隣を往き来する鼠 八九寸  
豊作へ鼠胃散がほしくなり 進之助  
目覚しに鳴られた鼠とび上がり 周志  
お米屋のねずみ脚鼠を病み続け 梅甫  
ねずみでもおれは留守居淋しがり 幽谷  
米倉のねずみおとりして育ち 東雲  
天井はいたちが獲ったらしい音 春集  
仏壇の鼠が母を眠らせず 梅志  
鼠捕りに鼠かかっている寒さ 轟風子  
猫八の声色きいてる鼠 豆秋

### 兼題「赤字」 新川博也選

腑甲斐ない赤字故郷から仕送られ 寿米  
その赤字女中の口から知れて来る 舟遊





心得た顔で満柄すすめ出し 敏子  
 もう我慢ならない顔が立ち上り 晃  
 貧しさは顔色を見る子に育て 薫風子  
 紅い灯が燈そつくりの顔に見せ 三舟  
 眼が悪るうても顔色の分かる母 梅志

川 淀川支部句会 (大阪市)

武部香林選

抱いた子の手つき持ちの主婦でなし 文見  
 主婦として今日も留守居の秋日和 幽谷  
 予想した通りにゆけば悠長者 句念坊  
 予想屋はみんな当つたよと云い 東洋男  
 予想したとおりの顔が立候補 陽子  
 見えすいた世辞で契約取り逃し 三十郎  
 借るつもりでとわかつた軸をほめ 多久志  
 嫌味なくお世辞が聞ける内祝 水堂  
 世辞一つ云えぬ夫で固い椅子 六竜子  
 賢妻はお世辞のちえもつて出し さぎす  
 アベックの通る道すじ大が吹え 歌二  
 アベックの前をパタ屋は目もくれず 若菜  
 峠道の野菊に見入る老夫婦 香林

川 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

教頭にまかせ校長今日も留守 庸佑  
 校長の自宅へ裏の手を伸ばし 文秋  
 動評へ校長ひとり眼鏡拭く 一三天  
 罰金を裸の大將べそをかき 晃  
 罰金をポン引税金だと思ひ 十悟  
 泰山鳴動罰金だけで事が済み すむ  
 罰金の一步手前をよけ 六竜子  
 罰金と別に追徴金の高 大路  
 勝負師の面影残るハンチング 薫風子  
 ハンチング白髪も見ざる社長さん 喜仙  
 お若いと言われてハンチングがぬけず 堰子  
 猟銃の孤獨が的のハンチング 亜鈍  
 鳥打帽行事目深にして覗らい 葉光  
 内職にちと縁遠い一万円 繁雄  
 一万円出来たら困る市場籠 唯義  
 抜け目なくネットに入れたフランク 梅里

川 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

宴会も社長の横は敬遠し 登志子  
 顔ぶれに敬遠をして気が弱し 文秋  
 妻が臥て馴れぬ洗台の派手な音 井平  
 蔵のずれ派手なアロハで気がくわす 貞句朗  
 未亡人世間の口が地味にさせ 清子  
 貸借が出来て互いに敬遠し 柳宏子  
 家たたむ落目へ神や仏だと 六竜子  
 パチンコ玉大の男が派手に追ひ 一栄  
 妬かれ過ぎ派手を喧嘩も遠い過去 井平

川 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

箒目を立てて御寺は金が取れ 句念坊  
 美容師を妻に不運な日の簪 九角  
 セメントの匂い飯場の湯気になる 尚平  
 セメントの割目知らぬ花が咲き 親生  
 アドバルーン風に誇をゆがめられ 鳥雀  
 電球の切れたのをためどうしよう 麗水  
 実印を抱いて老婆はひとと住み 白扇  
 慾の二本を夷子様の笹 紫蘭  
 競合の話だふ屋は皆符丁 古要

川 備前支部句会 (岡山県)

三村柳風子報

つけ馬も少し酔ってる千鳥足 久米雄  
 高飛車にどなって入る千鳥足 伊久野  
 千鳥足まだ起きてる我が家の灯 一声  
 千鳥足借金とりをやりすぎ はるえ  
 千鳥足ねじれた折詰を掲げ歩き 幽谷  
 千鳥足よう帰りましたといわれ あやめ  
 千鳥足自転車状にして歩き 永流  
 承諾をした積りではない生返事 秋月  
 生返事まあ一票と見て 帰る 幸仙  
 生返事もう洗濯機 届けられ 知恵美  
 生返事機嫌が突つたのも知らず 柳風子  
 農作を案山子が一人怒って居 自娘句

豊作(サツドリ)の案山子立ち 正州  
 案山子立つとこで昆蟲の鎌をき 美首子  
 魂胆のある御馳走の味にふれ 昌昌  
 あとはさる酒御馳走とも知らず 三六  
 御馳走もできぬ家庭の秋祭 竜泉  
 御馳走はないが夕餉の笑声 陽子  
 当選をさせて世話役息をつき 万女  
 綱帯をするにも娘ひまがいら 東岸  
 綱帯につよく生きると教えられ 浄美

川 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

喫茶店茶煙にむせた恋を知り 雄々  
 世話好きなきまぐらではやる喫茶店 無閑  
 数々の夢が集まる喫茶店 幸夫  
 コーヒーがなかなかへら差向い 一奎  
 逢いたく人との出会った喫茶店 美喜江  
 商談も縁談もある喫茶店 宇人  
 喫茶店田舎の母をまごつかせ 幸子  
 恋語る若さが長い喫茶店 素瓢  
 喫茶店二人で居れば気がとがめ 十七  
 姉さんの恋を育てる喫茶店 一机  
 逢引の場所になっている喫茶店 翠月  
 美人ではないがおもしろい人目ひき ユリ子  
 手袋がおしゃれに見える田舎道 定人  
 男親娘のおしゃれ気につかず 天邪鬼  
 幻滅を感じたおしゃれの足の裏 鶴丸  
 おしゃれして鏡の顔へひとり言 君枝  
 立読みのタイズで当てた二千元 節枝  
 予定額越して宴会派手になり 美笑

川 広島支部句会 (広島市)

平田越舟報

わがままですがと半分だけよれ 美文  
 祝日の天高き日をデモに行く 木公  
 丁寧な床屋で長く待つて刈り 弓路  
 不足なく育つて里の栗が好き 半休  
 床の字をつけて呼ばれて繁昌し 方川  
 年寄におまけのあんまほめられ 日進

いと云う強味妻には里があり 上利  
 へそくりの秘密がばれる大掃除 てるし  
 祝日のバスから山の色をほめ 秀月  
 暇な今日末屋自分の顔を判り 寛木  
 父母逝きでいつか遠の里さう 寅象  
 連休を映画で過す一人者 うしを  
 わがままを言えは家計へすひき 二三天  
 長生がメートル法に困らされ 湖水  
 田舎でも街でも回る床屋の灯 満歩  
 喧嘩してお里の知れた受け答え 自然  
 奥様のわがまま他人の目に余り 越舟  
 メートル法思わぬ量販で来る 幽香里  
 メートル法頑固な母をあわてさせ

川 篠山支部句会 (兵庫県)

小西無鬼報

美しい素足紅葉の下になげ 越山  
 素晴らしい紅葉へ揃う途中下車 凡志  
 紅葉狩り思わぬ人にフト出逢い 無鬼  
 姫く程の甲斐性もない骨と皮 雅佐女  
 妬いている証提目玉に陰があり 岳詩  
 噂さき現場押えたように云い 枝葉  
 妬けるわなと祝福してくれる 一雨  
 みおつくし待ち切れぬ鏡下ろし 左文字

色紙短冊  
 書畫用品  
 大坂戎屋  
 丹精堂  
 本町二丁目



未練ではないかと写真持ちつづけ  
明日はまた逢える握手が離さず  
忘れぬ未練が今日もこへ来る  
影二つ別れを告げた月明り 銀子

西尾青一路報

新人の今日の気疲れ空へはき 夢路  
秋の柄紙の紅葉の下で売れ 文女  
速報へ一喜一憂選挙事務 慧星  
新人と間違えられたカムバック 川太郎  
手術中義理の不安な顔も待ち 丹諺  
ウインドの豪華な秋はよそのもの 策平  
楽観がまだ忍従に堪えて行き 義子  
草花の種あれこれと蒔く余生 同  
新人の所作に始多すぎる 弦月  
焼芋屋一つにとどめ刺し 一杯  
出世などせんでもええと純な恋 一  
この苦勞染の種なんのその 知司  
要求が過ぎて後味悪うさせ 球  
機嫌とる苦勞知らぬと秘書の愚痴 美路  
仕合せな家をとりにくく虫の声 薫風子  
月賦でもよしと秋をチエツク着て 鬼美  
和服着て秋の歩道を踏みしめる しの女  
機嫌よく出たのが險に残る事故 舟遊  
さよなら二人は何か云い忘れ 善坊  
すらすらと綺麗な嘘を言う度胸 牧人  
社のニユース持つ見舞の女事務 寿  
名門の故にニユースにされた恋 すみ江  
アトリエのモデルへ秋の陽が当り 鶯汀  
イヤリングサクドレスもお洋好き 半歩

杏林川柳会 (大阪市)

麻生路郎選

我がままな子でと半分自慢也 一石  
我がままと意地とを名人取遣え 一伸  
我がまま出て定職に落ち付けず 同  
結ばれてあの我がままがひきまき 一哲  
背がどうの顔がどうのさよおくれ 小石  
べらぼうな結納金を専にかけ 一哲

見栄をはる火の気力はまたのこり  
卵焼せい一ぱいの母の見栄  
死んでから後の見栄まで書き遣し  
見栄坊に買わすつもりで仕入とき  
借金をしてキヤッシュで取り去に  
いささかの見栄大型で乗りつける  
気短かもなれてしまえば繁し易く  
修養にいらちが困窘を置い出し  
気短かの夫のあと忘れもの 路郎

南海電鐵川柳会 (大阪市)

友淵貴山報

だだっ子の頃も云われ披露宴  
駄々子の方が良かった八度五分  
マッシュルームさつりつまた文化の日  
乗換えに里の母をば見うしない  
乗換えを気にして夜汽車おきたま  
乗換えて故郷がやと近くなり  
乗換がなかなか来ない十二月  
乗換えて市電もわりに高くつき  
急行に乗換え吊袋え持てず  
乗換にもつと乗りたい幼稚園  
乗換の間違えらぬに着き  
乗換を車掌うるさそうに切り  
乗換に乗って来たほど待たされる  
乗換の駅前パチンコ屋ばかり  
乗換えたバトロン今度もグクグク

大阪通信病院川柳会

橋本幸男報

アパートの鍵をわたくし恋を逃げ  
アパートへ閉じ込められた日曜日  
アパートの谷間アラブ流行り出し  
アパートに麻雀を遊ぶ部屋を持ち  
奥さんの文句にしよけたお人好し  
お人好し席をゆすぎたなと思われ  
待ち呆け人がよすぎたからと思い  
産むことにしたを臨月まだくやみ  
臨月の腹はばからぬ歩きよう  
臨月になって結婚承認られ  
臨月の腹へ想像たくましゆう

臨月の妻よ達者な子を頼む 夏生  
臨月と思えぬ買物袋さげ ハナ子  
臨月へここで飲んでる電話なり 路郎

明和研究句会 (西宮市)

橋高薫風子報

名物が飽のはしへ首を出し 一傘  
読みく名前前で名物よく売れる しの女  
貸売の未練するする倒される 寄風  
未練らく切手を添えた便りが来 二州  
手切金取って未練まだ残り 満秋  
受売りのうま盤まではうまくゆき 半歩  
受売りの一人が欠けても頼られず 川太郎  
常連の一人が欠けても足らず 凡平  
常連は女將の素性知っており 夢  
常連に風呂の間に頼んどき 夢星  
常連に風呂の間に頼んどき 夢星  
常連へだまってコーヒートくされる 一光  
常連が真直ぐに来た縄のれん 一平  
常連の声に抱丁持ちかえる 克儀  
常連にされて常連ちとあわて 寿栄  
常連へマダムと切るとき出してくる すすむ  
灯がついて途切れた話の続きをし 芦郎  
街灯に我影ひよろりひよろりよと 竜太郎  
とも知らずやたら都会の灯を慕い 竜太郎  
豆電球残って寮の静かなり 弦月  
待ったなしばかり都会の灯につかれ 三舟  
わりとりにハツ手の落葉ありあり 夢路  
ゆすぶってゆすぶって掃く庭掃除 薫風子  
土筆もう落葉の下に早春をまち 山友  
落葉道かさりと人の気配する 舟遊  
自動車が通るとついで行く落葉 梅杯  
自動車が通るとついで行く落葉 梅志

老眼をかけていねむりらしらる 鬼美  
裏談になつていねむり口を入れ 舟遊  
はらはらとさせて悪友気前よし 天眼  
涙け刻を狙い悪友から電話 牧人

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太郎報

そろばんは三級と書く特技欄 阿部  
メートル法になつても母の五つ玉 柳太  
友情と別のそろばん持ち直し きはち  
四つ玉を俺におけとは殺生な 摩太郎  
フィナーレ足まだ踊る幕の内 三次  
顔よりも足を買われるモデル嬢 紀子  
自動車に合えば雨傘足へ着せ 栄一郎  
けられても腹の立たない孫の足 藤岡  
足取りがわからず捜査行き悩む 増治郎  
足取りがわからず捜査行き悩む 増治郎  
フランク足で稼いだ酩の味 川柳堂  
足無で今日タンサーの稼ぎ巾 六電子  
給料の袋を聞いたら恋がさめ 太郎  
給料の袋の嵩を目で主なり 一義  
給料日今日一日が亭主なり 克志  
子の給料待つつ失職の台所とみえ 万業  
給料に触れず仲人賞めそやし 万業  
給料が多いと嘆く給料日やなぎ 平木  
誰にも言わない不満聞いてやり 三次

館と料理と酒

アベノ橋地下映画食通街  
千日前 大劇裏  
梅里の店

大萬

★大万川柳(第九十五回)を募る  
兼題「青春」 路郎先生選  
締切・一月十五日 句数五句以内  
発表・一月廿一日 (店內掲示)  
投句は 阿倍野区松崎町三丁目  
一〇 大万川柳会宛

1月の句会

<b>所題時</b> 29日(木)六時 南海電鉄句会 国旗・決意・走書 難波高架下 親和クラブ	<b>所題時</b> 22日(木)六時 味・河童・賽銭 西成区西皿池町一自民党西成区支部	<b>所題時</b> 21日(水)六時 初め・元氣・盲点 旭町二丁目 金塚会館(隣馬場)	<b>所題時</b> 19日(月)六時 初桑・松過ぎ・婚約 堺市老松町島野工業KK	<b>所題時</b> 333句会 漫画・花嫁・三本立 十三西之町五丁目東淀川郵便局	<b>所題時</b> 13日(火)六時 都合・工面・問合せ 天王寺小学校	<b>所題時</b> 11日(日)一時 窓・日の丸・霜柱 西宮市鳴尾町新明和興業KK	<b>所題時</b> 10日(土)七時 プリンセス・一味 市電玉造電停南二丁大阪信用金庫
<b>所題時</b> 未定 乾杯・不眠症・休臭・夢中・計画 未定	<b>所題時</b> 25日(木)六時 茶の間・円満・お年玉・金廻り 高知市追手筋湖月川竹松風居	<b>所題時</b> 18日(日)三時 花嫁・都会・中年 西宮市今津谷向病院テレビホール	<b>所題時</b> 16日(金)夕 叫び・華やか・大笑い 四条繩手 仲源寺	<b>所題時</b> 11日(日)一時 寝巻・財布 名古屋市道徳町 近藤千古居	<b>所題時</b> 11日(日)一時 松三日・日の出・夢 東区恩田長沢 津秋六花居	<b>所題時</b> 11日(日)一時 人任せ・ファン・心臓・久しぶり 倉敷市水島弥生町四 相原一善居	<b>所題時</b> 11日(日)一時 いのしし・軽い・フラフラ・洋酒 米子市公会堂 日本園

**赤ペン・青ペン**  
 ▼明けましておめでとうございます。謹んで新年のご挨拶を申し上げます。「龍」と書いた大風が、新春の夜空をゆう然と風を切っている。この意気で路郎主幹以下編集局一同大ハッキリである。愛読者という糸から、川柳はグングン伸びていくし、健筆諸家という風を受けてますます上昇する。

▼ここ何年間か毎号ご執筆たまわっている東野大八氏、富士野鞍馬氏を始め、執筆者諸氏にここに厚く御礼申し上げます。

▼内容の充実と、最高峰を行く執筆陣の顔ぶれは他誌の追随をゆるさぬ、本誌の歴史を強く守って伸びて行くことをまず年頭にお誓いします。

▼句集「三人」が発売と同時に売切れてしまった。五百部限定版と

### 新春を賀し奉る

**川柳雑誌社**

編集局

麻生 路郎	北川 春巢	戸田 古方	清水 白柳子	八木 摩太郎	丸尾 潮花	真鍋 一瓢	水谷 竹荘	不二田 一三夫	後藤 梅志	橋高 薫風子	黒川 柴香	林 宏子	
麻生 路郎	中島 生々庵	土井 文蝶	編集局	北川 春巢	戸田 古方	清水 白柳子	八木 摩太郎	丸尾 潮花	真鍋 一瓢	水谷 竹荘	不二田 一三夫	後藤 梅志	橋高 薫風子

句会部 総務部

ことわつてはあったが入手もれの方々が多かつたことと思う、まったく凄しい人気があったという一語につきる。

▼温泉の、または自宅のコタツの中で、ジツクリ読んでいただけ

ことわつてはあったが入手もれの方々が多かつたことと思う、まったく凄しい人気があったという一語につきる。

▼温泉の、または自宅のコタツの中で、ジツクリ読んでいただけ

printed in Japan

(禁轉載)

## 川柳雑誌

第一号

定価 六〇円 (送料四円)

B列5号 毎月一回一日発行

昭和三十三年十二月廿五日印刷  
昭和三十四年一月一日発行

大阪市住吉区南瓦町西五丁目二番五番地  
編集兼発行人 麻生 幸一郎  
行印刷人 麻生 幸一郎  
大阪市住吉区南瓦町西五丁目二番五番地

発行所 **川柳雑誌社**

電話 大阪 〇六〇八一  
郵政口座 七五〇五〇

### 募 集

#### 課題吟募集

(十句以内)

土井文蝶選

大鶴喜由選

田垣喜大選

(二月十五日締切)

(十句以内)

若本多久志選

富岡淡舟選

直原七面山選

(二月十五日締切)

(十句以内)

麻生路郎選

北川春巢選

麻生路郎選

(毎月十五日締切)

#### 投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼「近作柳樽」は一設作家の雑吟を募る。

▼「課題吟」は誰でも投句が出来る。「川柳塔」への投句は不朽洞会員に限る。

疲れをとり  
抵抗力の強い  
からだをつくる

高単位総合ビタミン・ミネラル剤

**ポポン-S**

20日分 350円・60日分 950円・120日分 1600円



塩野義製薬株式会社

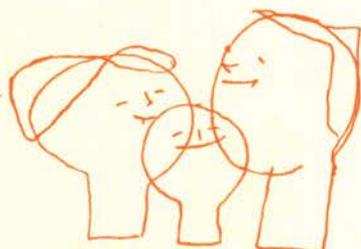
正 恵 方  
**初詣**



伊勢神宮  
山田・宇治山田駅下車  
榎原神宮  
榎原神宮駅下車  
三輪明神  
榎井駅下車バス  
春日大社  
近鉄奈良駅下車  
信貴山毘沙門天  
信貴山門下車  
初寅 1月8日

**近畿日本鉄道**

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL ④551-2



お酒泣かすな  
胃の用心!



☆愛酒家の総合保健薬☆

**ネストンゴールド**

30錠 200円・100錠 500円 他にネストン 20錠 100円

お酒をのんで悪酔、二日酔をしたり胃を害したりしては折角のお酒が泣きます。ネストンゴールドはお酒が美味しくのめてしかも酒後の精力を増強します

# 不眠 昼間療法!



日中のイライラもすぐとれる

昼間の服用だけで、夜自然に安眠  
ができ、日中のイライラや不安感  
もとれ、明朗・能率的な生活を送  
れる習慣性のない安全な新薬です  
スッキリした頭で作句の為に！  
晝はすつきり・夜はぐつすり

## ノクタン錠

東京・大阪 山之内製薬株式会社 福岡・札幌

# 初詣

住吉大社

水間観音  
大鳥神社  
方違神社  
もず八幡宮

## 南海電車

電車バスとも大增発

# 灘の名醸



# 菊正宗

宮内庁御用達

株式会社 本嘉納商店 販

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可  
昭和三十四年一月一日発行(毎月一回一日発行)

編集 渡辺 隆  
発行印刷人

発行所 川柳雜誌社

大阪市住吉区西五丁目二五番地 電話大阪六〇八一

定価六十円(送料別)

電話大阪七五〇五〇番

電話大阪七五〇五〇番